天神II遺跡

店舗建設に伴う発掘調査報告書

1989
前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

天神Ⅱ遺跡が所在する群馬県前橋市は、名山赤城山を北に望み、利根川や多くの詩人にうたわれている広瀬川市街地を流れる「水と緑」にかこまれた美しい県都です。

このように豊かな自然に恵まれた市域には、今から２万年以上前の旧石器時代から近世に至るまでの多くの遺跡が地下に眠っています。特に古墳時代においては、上毛野氏の本拠地として市域にはその数８００基といわれる大小の古墳が造られ、八幡山古墳をはじめとした国指定史跡の古墳８基のほか数多くの古墳を今に伝えています。奈良時代・平安時代に至ると上野国は大国と称され、その国府が元総社町におかれ、上野国分寺や国分尼寺なども建立され、上野国の政治・経済・文化の中心地として発展してきました。

このように、前橋の地は豊かな自然と共に長い歴史に培われて発展してきました。今後も各種開発に伴う発掘調査により、推定国府域内の古代史の空白部分が解明されていくものと確信しております。

このたび、前橋市教育員会へ建設に伴う埋蔵文化財の取扱いについての問合せがあり、確認調査を実施しましたところ、遺跡地であることがわかりました。遺跡の取扱いについて関係者と協議・調整を行いました結果、前橋市埋蔵文化財発掘調査団による緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査の結果、奈良～平安時代のものと推定される住居跡１０軒と井戸跡２基、土坑２基を確認いたしました。狭い範囲の調査ではありましたが、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査を実施するにあたり、物心両面にわたり多大な援助をしていただきました出水興産株式会社、また作業に従事していただきました方々に対し厚くお礼申し上げます。

本報告書が、元総社町及び周辺地域の歴史を解明する一助となり、また考古学研究の参考になれば幸いに存じます。

平成元年２月１日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　　二瓶益巳

例言

1．本書は都市計画法第29条の開発行為（店舗建設事業）に先がけた開発予定地の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は群馬県前橋市教育委員会のもとに組織された、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　二瓶益巳）の委託を受けスナガ環境測設株式会社（代表取締役須永眞弘）が実施した。

3．調査担当者　遠藤和夫（前橋市教育委員会文化財保護係主任）
　　新保一美（　　〃　　嘱託）
　　金子正人（スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部）

4．遺跡名、所在地、調査期間及び調査面積は下記の通りである。
　遺跡名　　天神Ⅱ遺跡　略称　６３Ａ－３７
　所在地　　前橋市元総社町８３４番地の２他２筆（834-3, 834-4）
　調査期間　発掘調査　昭和６３年９月８日～１０月７日まで実施した。
　調査面積　９５０㎡

5．本調査における出土遺物は、前橋市教育委員会が保管している。

6．本書はスナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部が作成に当たり、執筆及び総括を金子正人が担当し、遺物の復元実測に佐々木智恵子と角田朱美、遺構のトレースを吉田公夫、版下作成作業を鈴木赳夫、作業事務を柴崎信江が行った　。

7、測量業務の計画指導は須永眞弘（測量士第52614号）が行ない測量業務を板垣宏・須永嘉明が行った。調査の安全管理は石島正二・安藤直人が担当し調査助手を荻野博巳・白石光男が担当した。

8．本遺跡の発掘調査では次の方々に御協力戴きました。記して感謝の意を表す次第であります。
　群馬県埋蔵文化財調査事業団
　群馬県立歴史博物館

9．調査に参加した方々は次の通りであります。（順不同）

石井きよ子、	吉田公夫、	小林康典、	水澤和子、	近藤充郎、
河西三明、	藤田光夫、	近藤俊男、	長井武之、	須田シゲル、
石川サワ子、	内山恵美子、	中川類子、	山崎勘治、	

目次

序

例言

目次

第１章　遺跡の立地と環境
　　１．発掘調査に至る経過　1
　　２．遺跡の位置と環境　1

第２章　調査の概要
　　１　基本土層　5
　　２　調査方法　6

第３章　遺構・遺物
　　１　住居址　6
　　２　土坑・井戸址　１６
　　３　溝状遺構　１８
　　４　その他の遺構　１８
　　５　その他の遺物　１８

第４章　まとめ　２１

７号溝と小間割状遺構　２２

Ｅ－１・２・３グリット遺物出土状況　２３

住居址及び調査区内出土遺物実測図　２４

調査状況写真　３０

出土遺物写真　３２

第１章　遺跡の立地と環境

１．発掘調査に至る経過

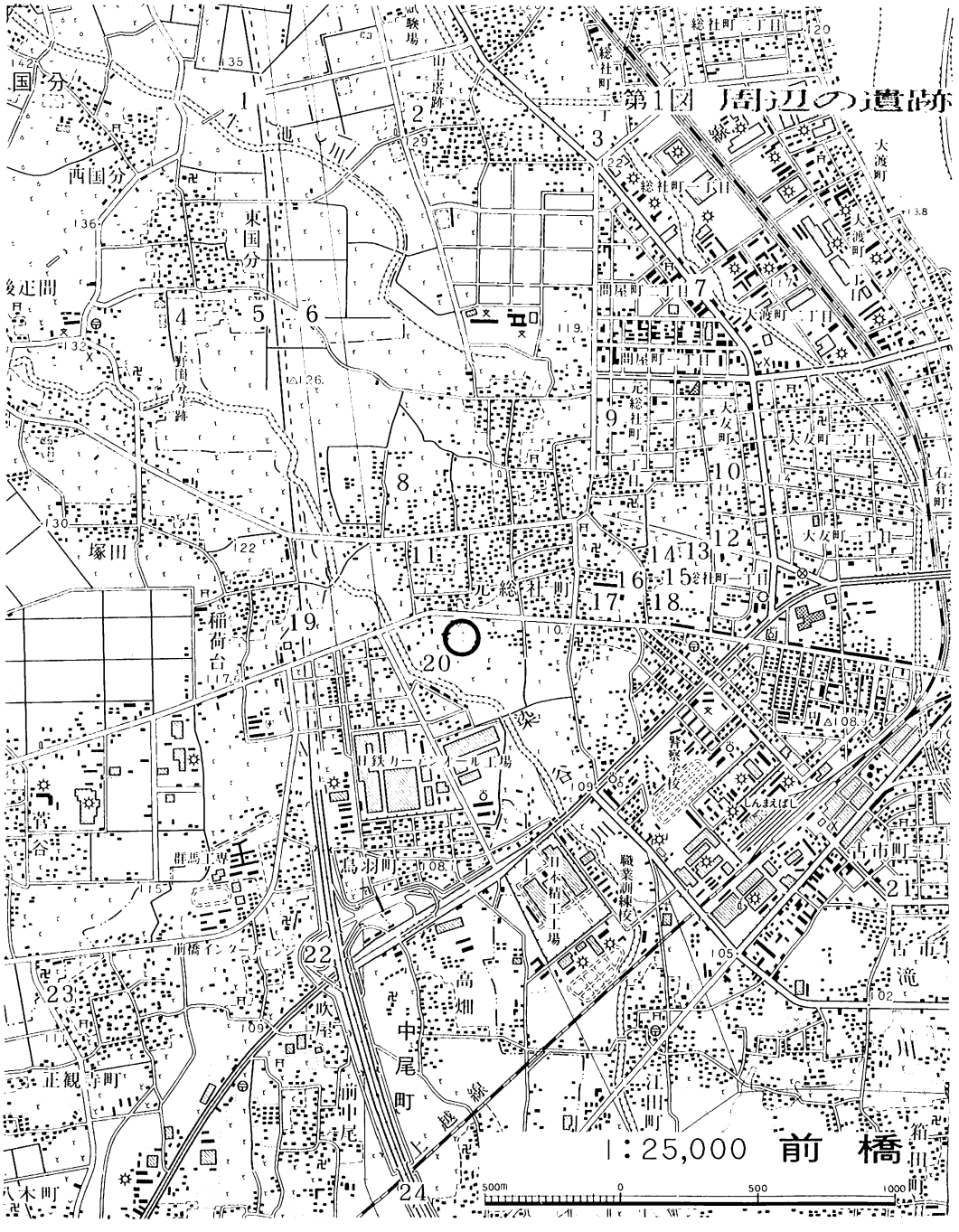
天神Ⅱ遺跡は店舗建設計画に伴う前橋市宅地開発指導要綱（昭和48年　前橋市告示10号）による開発行為（都市計画法昭和43年　法律第100号）の事前協議を受け、文化財保護法（昭和25年法律第214号）第４８条の２に規定する土木工事に先駆けての発掘調査を実施するもので前橋市教育委員会が開発行為者（出光興産株式会社大宮支店長山本光廣氏）と協議調整し昭和６３年９月８日より作業を実施することとなった。昭和６１年度隣接地の調査により奈良・平安時代の住居址や井戸跡等が確認され、遺物も多数検出されている。また東山道の推定地に近く推定上野国の国府域内と考えられる地域であります。

調査経過（調査日誌より）

９月	８日	表土掘削作業開始　発掘調査機材・作業員休憩施設の設置
	９日	プラン確認作業　住居址１軒確認
	１２日	安全防護柵設置
	１４日	住居址４軒確認される。見学者来跡
	１７日	雨のため調査難行、ポンプ２台で排水する。
	１９日	平面実測（１：２０）開始する。見学者来跡
	２８日	東側調査区の残土を調査終了区に搬出開始
	２９日	東区にトレンチを入れる。
１０月	５日	調査終了
	７日	調査器材片付ける。
	１３日	埋め戻し作業開始
	１５日	埋め戻し完了　安全防護柵撤去

２．遺跡の位置と環境

天神Ⅱ遺跡の周辺を地形的、地質的に概観すると、本遺跡地は、前橋市の南西部で広瀬川低地帯の面より高台をなす前橋台地のほぼ中央、利根川右岸に位置し、標高１１４．５ｍの平坦な土地である。前橋台地は火山泥流堆積物とそれを被覆する水成ローム層から成り立つ洪積台地で、東は広瀬川低地帯と直線的な崖で画され、西は榛名山麓の扇状地へと続いている。本遺跡の東を流れている利根川はかつては広瀬川低地帯を流れていたもので利根川の左岸と右岸の前橋台地は、地質的には同質である。前橋台地の地質は上部から、表土、水成上部ローム層（泥炭質層・火山灰質シルト層・軽石層等を含めた）、前橋泥流堆積物層、更にその下には厚く前橋砂礫層が続いている。



1．国府境遺跡　2．山王廃寺　3．昌楽寺廻村東遺跡　4．国分僧寺
5．国分寺中間地域遺跡　6．国分尼寺　7．稲荷山古墳　8．草作遺跡
9．閑泉樋遺跡　10．堰越Ⅱ遺跡　11．屋敷遺跡　12．堰越遺跡
13．大友Ⅱ遺跡　14．大友Ⅲ遺跡　15．元総社明神遺跡　16．寺田遺跡
17．元総社小学校校庭遺跡　18．明神東遺跡　19．鳥羽遺跡　20．天神遺跡
21．赤烏遺跡　22．中尾遺跡　23．正観寺遺跡　24．日高遺跡

周辺の遺跡としては、

1・国府境遺跡　古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡、竪穴住居１５０軒、溝、井戸跡、土坑などが検出された。県内初の地下式横穴墓を検出した。

2・山王廃寺　日枝神社境内に塔心礎があり、石製鴟尾、礎石、緑釉水注、掘立柱建物跡、住居址３６軒以上、溝、銅鋺、塑像仏頭片、素弁８葉蓮花文瓦、三彩等出土。

3．昌楽寺廻村東遺跡　建物遺構と推定される柱跡を検出。
昌楽寺廻村東向Ⅱ遺跡　奈良・平安時代の住居址４軒、縄文時代の土坑４基、井戸跡１基が確認された。

4・国分僧寺　塔跡に１２個の礎石と、金堂跡に１５個の礎石が認められる。発掘により築地、犬走り、濠等確認。Ｂ軽石降下以前に築地が崩壊していたことが判明した。

5・国分寺中間地域遺跡　国分僧寺尼寺の中間地域及び僧寺西側の地域を含む。掘立柱建物跡、濠、築垣の基礎、住居址等発掘。「東院」と記した墨書土器、灰釉陶器、瓦、砥石等が出土した。住居址内に瓦を持ち込む例は９世紀以降と調査者は指摘している。

6・国分尼寺　伽藍配置は南北に主要建物の並ぶ構造であり、その寺域は恐らく南北１．５町、東西１町の規模ではないかと考えられている。中門・金堂基段状遺構、講堂礎石群等発掘。

7．稲荷山古墳　墳丘は殆ど平坦化され、その中央部のみが径１０数m、高さ２mほど残っている。

8．草作遺跡　古墳時代と平安時代の住居址１８軒、井戸跡３基、土坑１１基が確認された。

9・閑泉樋遺跡　古墳時代住居址３軒と奈良・平安時代溝跡１条中世溝跡１条が確認されている。
閑泉樋南遺跡　古墳時代住居址４軒、奈良・平安時代溝１条が検出された。

10．堰越Ⅱ遺跡　平安時代の住居址６軒と時期不明の土坑２基が確認された。

11．屋敷遺跡　古墳時代（鬼高Ⅱ期）住居址１軒、平安時代の住居址が４軒確認された。中世の溝は薬研堀で上幅は８m深さ４mであった、井戸跡２基が検出された。

12．堰越遺跡　奈良平安時代の住居址１８軒、溝１０条、土坑５０基以上が検出され、Ｂ軽石を覆土に含む遺構群として溝６条、土坑１４基、井戸４基が検出されている。これら遺構群の中でも、湧水点を有す溝と群集して存在する土坑の性格には興味が持たれる。縄文時代中期の加曽利Ｅ式土器及び石器が出土している。

13．大友Ⅱ遺跡　溝６条、地下式土坑１基、井戸跡に伴う遺構１基、ピット状遺構９ケ所が検出された。

14．大友Ⅲ遺跡　古墳時代中期の住居址１軒古墳時代後期の住居址２軒奈良・平安時代の住居址２軒溝３条土坑１基が確認された。

15・元総社明神Ⅰ遺跡　古墳時代住居址１５軒、平安時代住居址３０軒、土坑１０基、井戸跡８基、中世墓坑１基が確認された。
同Ⅱ遺跡　古墳時代前期（石田川期）の住居址３軒、古墳時代後期（鬼高期）５軒が確認され、平安時代住居址３８軒、大溝１条、中世末期の八日市場城跡と推定される溝３条が検出

された。

同Ⅲ・Ⅳ遺跡　住居址７４軒、古墳時代前期１３軒、古墳時代後期１４軒、奈良・平安時代住居址４７軒、溝４０条、杭列その他木製品が検出されている。

同Ⅴ遺跡　古墳時代前期住居址４軒、古墳時代後期２５軒、奈良・平安時代住居址２５軒、溝３９条が検出された。

※国府推定地Ⅰ　総社神社を中心とした方八町の地域を推定するもので元総社小学校敷地内等発掘調査。群馬県最古の蒼海城の１部はこの範囲内に含まれる。（金坂清則氏の説）

※国府推定地Ⅱ　国分寺の東縁より東方に６町、南に５町行った所に国府の北縁がある。総社神社を東側に含む６町四方の地域を想定する。（松島栄治氏の説）

※尾崎喜左雄「国府推定地域の発掘調査」前橋市史第１巻　１９７１

※峰岸純夫「東道－東山道の復元」『群馬県佐波郡東村誌』１９７９

※川原喜久治「推定上野国府跡地覚え書き試み」『鳥羽遺跡月報№１６』（群馬県教育委員会鳥羽事務所）１９８０

16．寺田遺跡　古墳時代Ｃ軽石降下後黒色泥質土中より石田川式土器鬼高期の土器が検出された。奈良・平安時代の大溝と土器及び木製品が検出された。

17．元総社小学校校庭遺跡　古墳時代の住居跡と掘立建築遺構が検出されている。尾崎喜左雄「第三編古代下第１章国司政治」『前橋市史』前橋市教育委員会１９７１

18．明神東遺跡　古墳時代台付き甕と平安時代の住居址６軒、土坑６基、溝５条、竪穴状遺構１基が確認されている。

19・鳥羽遺跡　奈良・平安時代の住居址、掘立建物跡、井戸跡、溝、竪穴遺構、墓坑、土坑、柵列、中世墓等を発掘。土坑中よりＢ軽石の直上に土師質土器の一括資料を得る。

20．天神遺跡　奈良・平安時代の住居址３２軒と土坑１４基、井戸跡３基が検出された。

21．赤烏遺跡　古墳時代の住居跡、土坑、溝、畝状遺構、中近世の溝を検出、奈良平安時代の須恵器瓦片が出土した。

22・中尾遺跡　古墳時代前期の住居址４軒、中～後期の住居址数軒、奈良・平安時代の住居址３００軒以上確認。土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器、石製品等が出土している。

23・正観寺遺跡　弥生～平安時代にかけての竪穴住居址１５０軒前後発掘。他に土坑、掘立柱建物遺構、大溝、円墳、井戸等を検出。高さ１．１ｍ周囲２×２ｍの巨石があり、土師器の坏・甕、須恵器の高坏・瓿・短頸壷など鬼高期の特徴を示す多くの遺物を伴って発掘された。

24・日高遺跡　関越道の路線内を群馬県教育委員会が調査を行い、高崎市で弥生水田と住居址の試掘を行なった。さらに圃場整備に伴い高崎市で行った地域の二ケ所を含む。県教委の調査の時この遺跡は全国的に注目された。高崎市が行った昭和５３年度の調査では１町（１０９ｍ）四方の区画による条理制水田が確認された。弥生時代（住居址・水田・方形周溝墓）古墳時代（住居址）平安時代（水田址）中世（井戸跡・溝）

樋越遺跡　南北に走る溝と７基の土坑が確認された。なお溝底に木杭と竹杭が３１本検出された。螺旋状暗文を有する坏が出土している。

柿木遺跡　８世紀後半から１０世紀後半までの住居址６軒が確認された。

村東遺跡　住居址２１軒（古墳時代中期２軒、古墳時代後期から奈良時代始めの住居址１５軒、奈良平安時代の住居址３軒）、溝１条、集石遺構１ヶ所、中世の堀１条が確認されている。

稲荷山古墳（総社町総社）　輝石安山岩と角閃石安山岩の自然石乱石積の横穴式両袖型石室を持つ古墳である。羨道部より出土した金銅製品には麻製と絹製と思われる布が貼付けられており花弁のような打ち出しがなされている。周囲には庚申塔が６７基確認された。

二子山古墳　前方部、後円部の２ヶ所に両袖の横穴式石室を持つ。全長約８．９９ｍ二段構築の古墳。周濠は盾型を想定する。幅２４～２５ｍ。前方部石室は自然石乱石積。後円部石室の天井石以外は角閃石安山岩の削り石を使用。

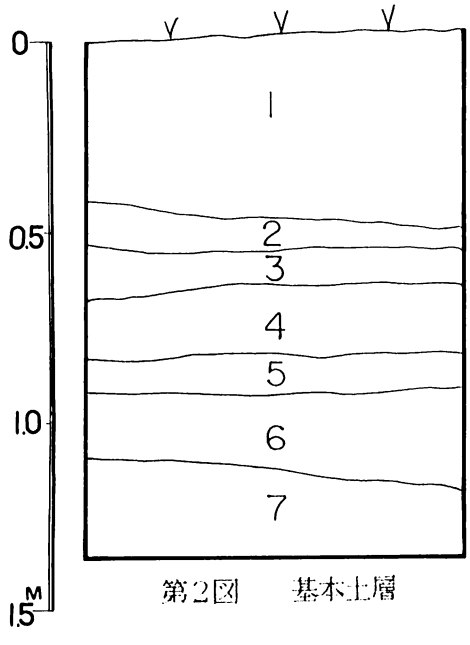
愛宕山古墳　巨石を使用した横穴式両袖型石室。石室内に家型石棺（凝灰岩製）が安置。壁石は巨石の輝石安山岩の山石を使用。角閃石安山岩も認められる。

遠見山古墳　主軸の長さは約７０ｍ。後円部東南部分は封土が流れ石室の位置を示す。墳丘南側には周濠の一部や葺石が認められる。

王山古墳　墳丘全長７５．６ｍＦＡ上に構築。２～３段の葺石が全面にまわる。石室全長１６．３７ｍで県下最長。両袖型通目積。玄室幅に対する同長の比は２．７。

第２章調査の概要

１．基本土層



第２図　基本土層

１層　盛り土（ロームと礫）
２層　盛土（黒色土層）
３層　耕作土層
４層　Ｂ軽石を２０％ほど含む暗褐色土層
５層　焼土粒を含む（粘性の強い）暗褐色土層
６層　焼土粒を含む（粘性が強い）褐色土層
７層　灰白色粘土層（地山）

２．調査方法

調査地の北西隅に座標基点を設定し、調査地全体に５ｍ単位の方眼を設定した。主軸はＹ軸座標を南北方向に取りその直交方向をＸ軸とし、グリット名ははＸ軸をアラビア数字（１～８）Ｙ軸をアルファベット（Ａ～Ｇ）で表記した。Ａ－０グリットはＸ＝42,700.000ｍ、Ｙ＝－71,465.000ｍとして発掘調査区内を５ｍごとに区分けし東西・南北にグリットを設定した。標高は１１４．５０ｍを遺跡内に移しＢＭと定めて調査を進めた。

調査は隣接の天神遺跡で奈良・平安時代の住居址３２軒、土坑１４基、井戸跡３基が確認されているので店舗建設予定地部全面を調査対称とした。掘削は耕作土下の鉄分凝集層下面までバックホゥによって行い、その後は手作業により遺構の検出に勤めた。

第３章　遺構・遺物

１．検出された１０軒の住居址は、奈良・平安時代の住居址である。

２．土坑は２基確認された。１号土坑からは坏と高台付埦が検出された。２号土坑は須恵器坏蓋等が出土しておるが時期を決定するには小破片すぎる。

３．井戸跡は２本確認された。１号井戸跡は円筒状で２号井戸跡はロート状を呈する。

１号住居址

調査区の北西隅に位置し、Ａ－０，Ｂ－０グリットに所在する。確認面では炭化物・黒色灰・焼土を含む状況で、南東隅に井戸跡が重複する状況であった。井戸跡は耕作土直下から掘り込まれており１号住居址が井戸跡より古いと考えられる。規模は南北方向２．９ｍで、東西方向２．６５ｍの平面形は隅丸方形を呈する。壁は２４～３１㎝掘り込んで床面に達し、床面積は７．６８㎡を測る。柱穴は見られない。住居址の主軸はＮ－１０°－Ｅである。覆土は黒褐色土を基調にしている。カマドは東壁の南寄りに位置する。

出土遺物

№２　坏（土師質）口径９．７㎝底径５．８㎝器高２．１㎝　胎土は粗砂混入　焼成良　色調黄褐色器形の特徴　体部から口縁部にかけて直線的に開く　内外面回転撫で　糸切り痕明瞭、底部中央が突出　2/3残

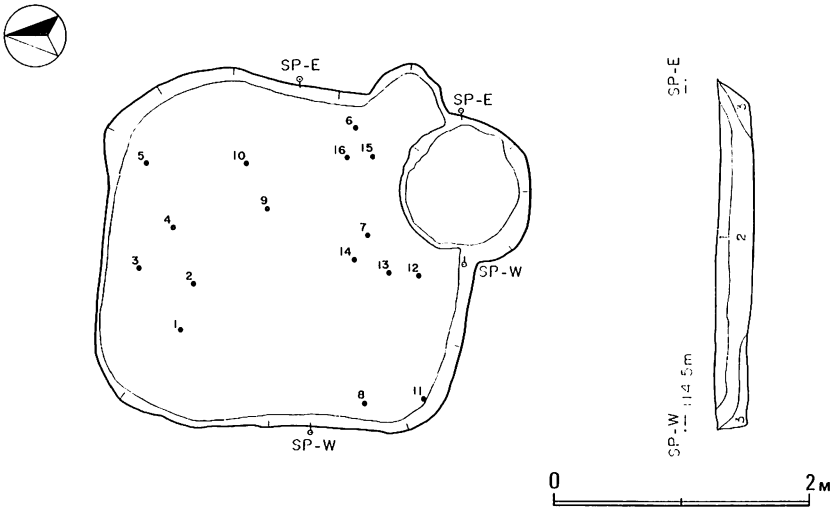
№９　刀子　幅２．０㎝　鉄製品　切先を欠失する。残存長１０．３㎝刃部４．３㎝茎６．０㎝を測る、床面より出土。

Ｂ－０グリット一括　坏（土師質）口径９．６㎝底径５．８㎝器高２．０㎝　胎土は細砂を含む焼成良　色調にぶい橙と黒褐色部分がある。器形の特徴　体部は直線的に立ち上がり口唇部に至る器肉は厚い。内外面回転撫で　底部は糸切り後粘土を補い再度糸切りをした事が伺える　完形

№１２　埦（土師質）口径１４．５㎝底径８．０㎝器高６．０㎝　胎土は粗砂含む　焼成やや軟　色調褐色　２／３スス付着　器形の特徴　体部は僅か内湾しながら口縁部迄開く　内外面回転撫で　糸切り痕明瞭　完形

覆土一括　土錘　残存長４．６㎝　幅最大径１．３㎝内径４㎜　色調　左端褐色中央から右端は

第3図　1号住居址



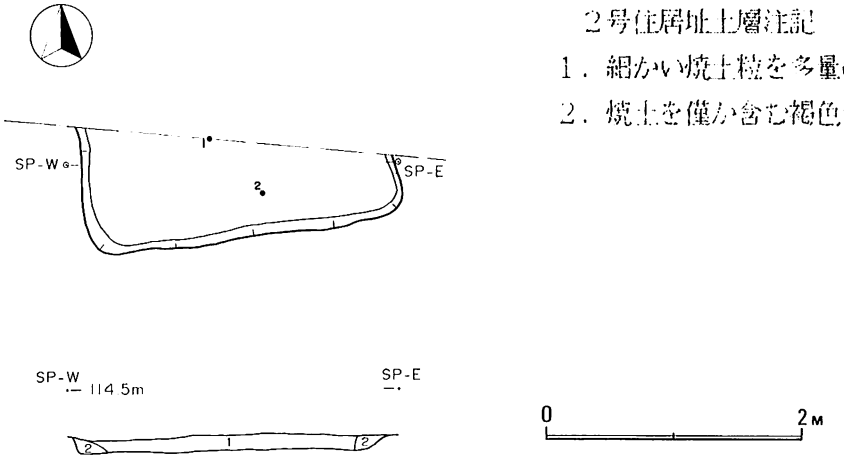
1号住居址土層注記

1．粒状の焼土と炭化物を含む暗褐色土層

2．1層より焼土を多く含む暗褐色土層

3．粘性が強く1層より焼土の少ない黒褐色土層

第4図　2号住居址



2号住居址土層注記

1．細かい焼土粒を多量に含む暗褐色土層

2．焼土を僅か含む褐色土層

黄褐色を呈す。２／３は黄褐色を呈す。

Ｂ－０一括高台付埦（須恵器）口径１６．４cm底径８．６cm器高５．５cm黒色の細砂粒混入　焼成堅緻　灰白色体部は丸味を持ち立ち上がる。灰釉　体部から口縁部は直線的に開く。内外面に煤付着。外面強いロクロ目残す。高台は糸切り後貼付け高台。内面重ね焼痕明瞭、回転ナデ。1/2強残

１号住居址一括遺物として自然石を利用した１面使用痕が見られる砥石と桃の種子の炭化したもの１点、近世の陶器１１点、剥片３点、緑泥片石の小破片３点が検出された。

２号住居址

調査区の北側中央部に位置し、Ｂ－３グリットに所在する。南東壁コーナーが強く焼けており、コーナー付近にカマドが存在したものと考えられる。規模は東西方向が２．４５ｍの長方形を呈するものと考えられる。壁は１２～１５cm掘り込んで床面に達し、調査で確認できた床面積は１．７２㎡であったが北側にひろがりを持つものと考えられる。住居址の主軸はＮ－８２°－Ｅである。覆土は褐色土を基調にしている。カマドは南東コーナーに設置されたものと考えられるが調査範囲外なので確定するにいたらなかった。

出土遺物

皿　推定（口径１５．０cm底径８．４cm器高２．４cm）　胎土；非常に細かい粘土を使用焼成；良橙色一部煤付着　体部は浅く外反しながら開く、高台は「ハ」字状を呈す。外面；口縁から体部は回転ナデ、底部は糸切り後、底部よりやや小さい高台が貼付けられている。内面；回転ナデ、体部から底部は同心円状のナデが見られる。1/5弱残

盤(須恵器)推定（口径１６．８cm底径１２．０cm）器高４．０cm　多量の砂粒を含む。堅緻　灰色底部から体部は丸味を持って立ち上がり口辺は強いナデにより薄く内傾して見える。内外面回転ナデ、　外面；高台は４×４mmの方形の細い高台が貼付けられている。底部外面はヘラナデ。約1/2残

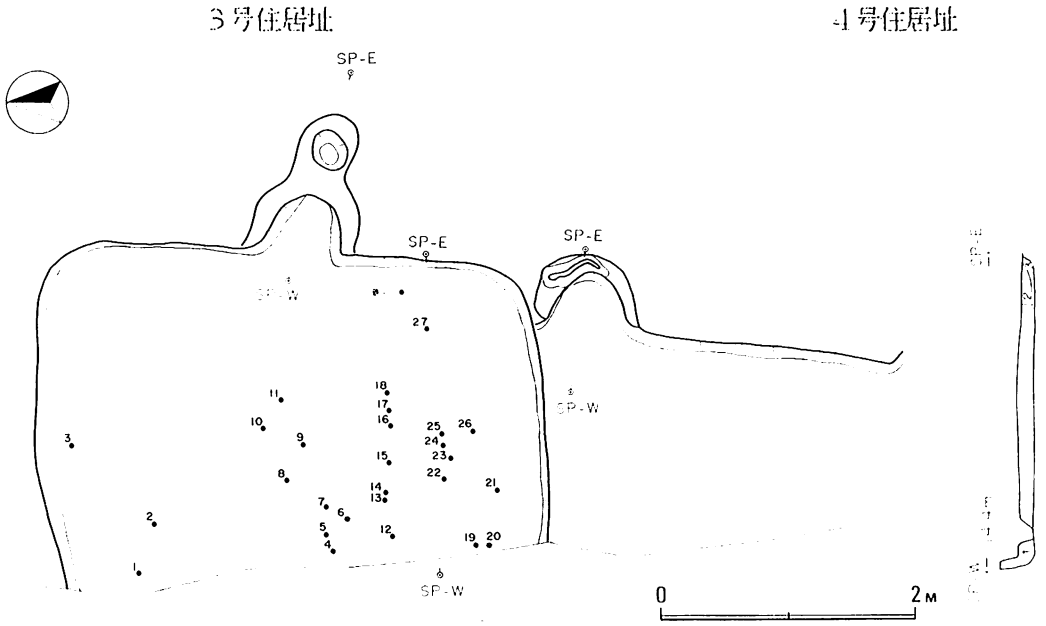
３号住居址

調査区の西側に位置し、Ｄ－０グリットに所在する。確認面での土質は周辺全体が焼土混じりの褐色土であり住居址覆土はそれより僅か焼土が多い程度でプランの確認の非常に難しい住居址であった。カマドは良好な遺存状態で、規模は南北方向を長軸とし３．９ｍ短軸２．７３ｍ以上と考えられ平面形は隅丸長方形を呈する。確認面からの立ち上がりは１０cm前後の掘り込みで床面に達している。床面積は１０．６５㎡を測ることが出来た。住居址の主軸はＮ－８９°－Ｅである。覆土は明るい褐色土を基調にしている。カマドは東壁の中央部に位置し、良好な遺存状況であり煙道部まで調査する事が可能であった。

出土遺物

№１；鉄　長さ８．７cm断面径１．２cm　断面は楕円形を呈する。錆化が進み、用途は不詳。床面より出土、先端に向かうほど細くなり途中で直角に曲がっている。

第5図　3号・4号住居址

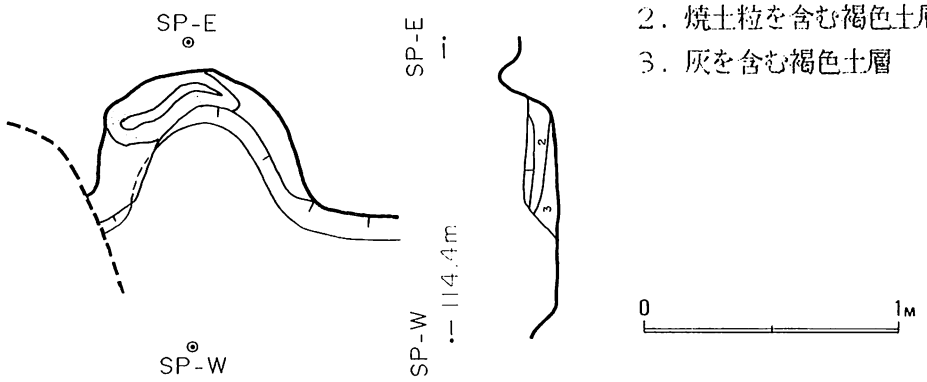


3号住居址土層注記

1．焼土と炭化物を含む褐色土層

2．1層よりも粘性のある褐色土層

第6図　4号住居址・カマド



4号住居カマド土層注記

1．粘土ブロックの褐色土層

2．焼土粒を含む褐色土層

3．灰を含む褐色土層

№４；高台付埦　底径１２．６cm残存高２．２cm暗青灰色　底部中央が厚く広い。薄い高台が「ハ」字状に開く。外面；高台内側はヘラナデ痕明瞭。内面；回転ナデ。底部1/4残

№８；埦（土師質）底径５．８cm残存高２．０cm　細砂粒を含む　焼成良　灰黄色　ロクロ整形痕を残す。外面；底部回転糸切り後低い高台を貼付け。内面回転ナデ。３片接合、底部のみ。

№２６；坏　推定口径１２．０cm底径５．８cm器高３．６cm　細砂を含む　焼成；良　灰褐色　底部は厚く、体部は内湾しながら立ち上がり中位で外反し口縁部で直状に立つ。外面ヘラナデ。内面口縁部にロクロによる段を持つ。1/4残

３号住居址一括遺物として黒曜石の破片で２．３cm×１．５cmが出土している。

４号住居址

調査区の西側に位置し、Ｄ－０グリットに所在する。本住居址周辺全体が焼土まじりの褐色土で、北側を３号住居によって切られており南側には７号住居のカマドが接近して確認された。南北方向が２．７０ｍ以上、東西方向は調査区外にのびるので規模の確認は不可能であった。平面形は長方形を呈するものと考えられる。壁は１５cmほど掘り込んで床面に達している。住居址の主軸はＥ－６°－Ｓである。覆土は明るい褐色土を基調にしている。カマドは東壁の中央部に位置するものと考えられる。

５号住居址

調査区の西側中央に位置し、Ｄ－２グリットに所在する。覆土と周辺の土質との相違が少なくプラン確認の難しい住居址であった。炭化物焼土の量が僅か多く含まれる事から確認された。規模は南北方向が３．６７ｍで長径を示し、東西方向は３．０ｍの隅丸方形であった。壁は９．５～１７cm掘り込んで床面に達し、床面積は１１．０１㎡を測る。住居址の主軸はＥ－３°－Ｓである。覆土は褐色土を基調にしている。カマドは東壁の中央部やや南寄りに位置する。本住居址のカマドは僅かに赤褐色を呈するのみであった。

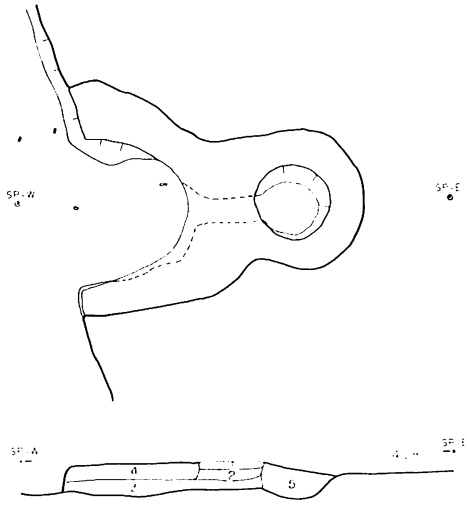
出土遺物

№１９；埦　推定（口径１２．０cm底径４．３cm）残存高４．０cm　粗砂粒多量に含む、やや軟　褐色　体部は内湾しながら立ち上がり口縁部で外反する。外面回転ナデ、底部に高台の剥れと思われる痕あり。内面回転ナデ。3/4残

№４；高台付埦　須恵器　底径８．０cm残存高３．６cm　粗砂混入　堅緻　青灰色　高台付埦の高台部と思われる。貼付け高台で外横面撫で、高台は直線的に比較的長い。内面回転ナデ。高台部の1/2残

覆土一括；坏（須恵器）口径１３．０cm底径５．８cm器高４．１cm　微細砂粒混入　堅緻　灰白色　体部は深く僅か内湾しながら立ち上がり口唇部で外反する。内外面回転ナデ。外面底部は粗い糸による糸切痕明瞭。内面底部に同心円状のナデ痕が見られる。ほぼ完

第7図　3号住居址カマド実測図（1．30）

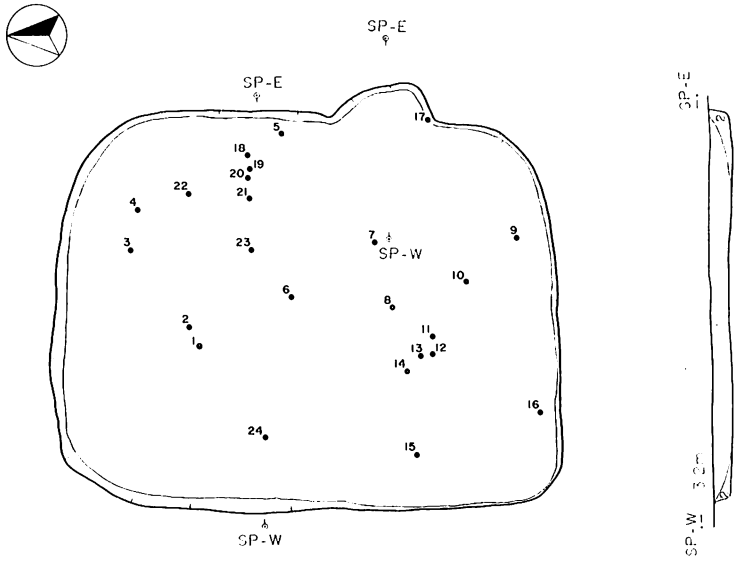


3号住居址カマド土層注記

1．焼土層（カマド煙道部天井）
2．黒色の灰を含む褐色粘質土層
3．焼土粒を含む褐色粘質土層
4．粘土
5．焼土ブロックを含む褐色土層

0　1M

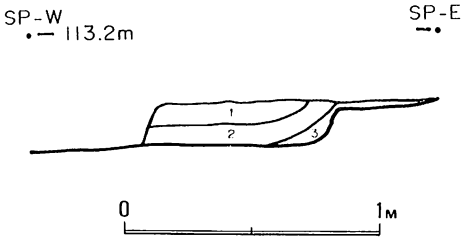
第8図　5号住居址



5号住居址土層注記

1．焼土と炭化物を含む暗褐色土層
2．1層よりも焼土と炭化物の少ない粘性の強い暗褐色土層

0　2M



5号住居址カマド土層注記

1．焼土を僅か含む黒褐色土層
2．焼土と炭化物を含む褐色土層
3．（灰白色）灰と褐色土の混土層

覆土一括；埦　底径７．０cm残存高１．９cm　浅黄色　平らな底部に低い高台が付く。外面回転ロクロ成形、底部は回転糸切り痕。内外面（高台内側を除いて）均一な緑釉がかかっている。底～高台部　３号住居址３号溝Ｅ－２グリットから出土した４片が接合された。

５号住居址一括遺物　胎土は黄灰褐色で釉は刷毛ぬり、外面重ね焼痕が見られ、内面にかえりがあり小型壷の蓋と考えられる破片と、紡錘車に使用されたと思われる灰色の円盤状破片が検出された。（瓦質）

６号住居址

調査区の中央部に位置し、Ｄ－２グリットに所在する。覆土は僅かに炭化物と焼土を多く含むものであった。規模は、南北方向が３．８６ｍ、東西方向は３．４５ｍの隅丸長方形であった。壁は１０．５cm掘り込んで床面に達し、床面積は１３．３１㎡を測る。住居址の主軸はＮ－８２°－Ｅである。覆土は黒褐色土を基調にしている。カマドは東壁の中央部やや南寄りに位置する。本住居址のカマドは側壁の焼け込みも少なく、又中央部から検出された砂岩は僅かに焼けた形跡が伺われ位置からして支脚石と考えられる。

出土遺物

№１；坏　口径１０．４cm底径５．６cm器高４．２cm　砂粒混入　焼成；良　灰白色　体部は内湾し口縁部で僅か外反する。内外面煤付着。外面粗いナデ、底部は糸切りで厚味を持つ。内面回転ナデ、底部中央が盛り上がっている。底部完、口縁1/6残

№１６；敲石　長さ１２．２cm幅４．８cm厚さ３．２cm両端に打痕あり、全面に擦痕が見られる。

№１９；用途不明；長さ８．１cm幅６．５cm厚さ３．２cm　角閃石安山岩　１．５cm幅の刃物痕が３ヶ所、擦痕３ヶ所が見られる。

７号住居址

調査区の南西部に位置し、Ｄ－０グリットに所在する。北側に４号住居、南側を８号住居と切り合い周辺には土器片の散布が著しく、至近に攪乱がありプランの確認が明確にできなかった。カマドの主軸方向はＥ－１７°－Ｓである。覆土は明るい褐色土を基調にしている。カマドは東壁に位置するものと考えられる。

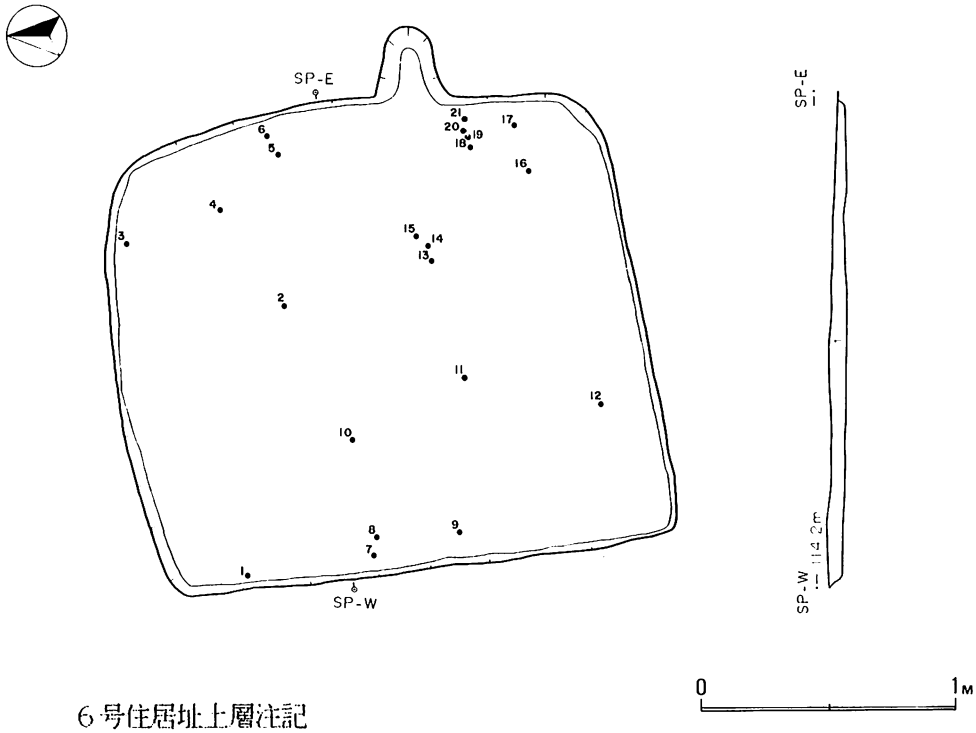
出土遺物

№３７；高台付埦　推定底径８．０cm残存高２．５cm　多量の砂粒を含む　堅緻　灰白色　糸切りの底部に肥厚した高台が貼付けられている。外面回転ナデ、煤付着。底部と高台の一部

８号住居址

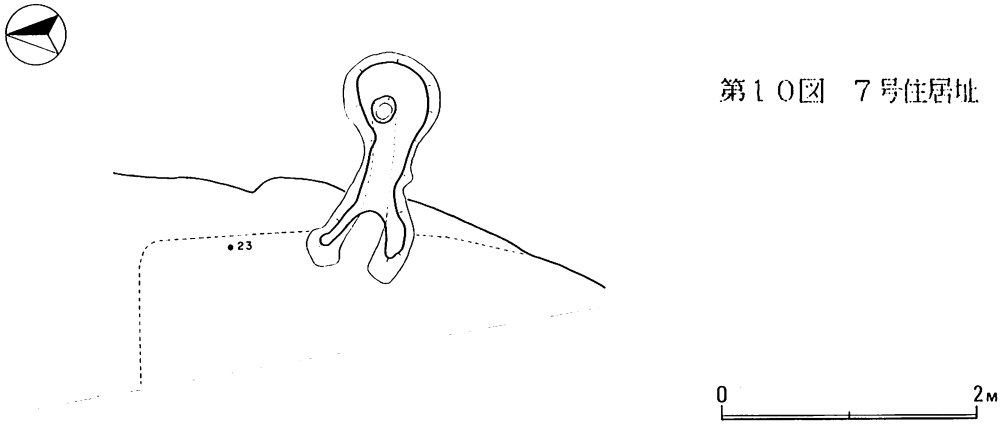
調査区の西側に位置し、Ｅ－０グリットに所在する。本遺構はカマド以外は調査区外に広がりカマド両袖部の補強材として使用したと考えられる焼けた石が３個と焼土が見られたがカマド全体も調査する事が出来なかった。

第9図　6号住居址



6号住居址上層注記

1．焼土と炭化物を含む黒褐色土層



第10図　7号住居址

９号住居址

調査区の南東隅に位置し、Ｅ－５，６、　Ｆ－５，６グリットに所在する。東傾斜の砂質の粘土層が焼土を含む暗い褐色土に覆われてから、浅い溝が埋まりそれから築かれた住居址でプラン確認の非常に難しい住居址であった。規模は東西方向３．３６ｍ、南北方向２．７１ｍの平面形は隅丸の菱形を呈する。壁はカマド付近で３０．０cm、西壁で１６～１９cmの掘り込みで、床面は東に傾斜している。床面積は９．１０㎡を測る。柱穴は壁外のカマド両脇に２ヶ所、北側３ヶ所、北西コーナーで、立ち上がり部に１ヶ所確認された。住居址の主軸はＮ－８０°－Ｅである。覆土は暗褐色土を基調にしている。壁溝は検出されなかった。カマドは東壁の中央部に位置し袖石、支脚石の存在が確認され左袖石は２石で形成されていた。内面は良く焼け砂質の白色粘土層まで掘り込まれていた。完形に近い土器が４点出土した。

出土遺物

№３；甕　多量の細砂と僅か粗砂を含む　堅緻（還元）　灰白色　胴部の一部と思われる。外面に僅かに平行叩き目紋が見られ、内面には青海波紋状の叩き目が残る。

№８（カマド）；坏（土師質）口径１０．１cm底径４．９cm器高３．５cm　多量に砂粒を含む　焼成；良　にぶい橙色　底部は厚く体部は内湾気味に立ち口縁部で薄く外反する。内外面回転ナデ、底部右回転糸切り痕。ロクロ目明瞭。3/4残

№１６；坏（須恵器）　口径１２．５cm底径５．８cm器高３．８cm　焼成；良　暗青灰色　体部は内湾しながら立ち上がり口唇部は薄く直線的に開く。外面回転ナデ、ロクロ目が見られる。底部糸切り。内面回転ナデ底部中央が盛り上がる。3/4残

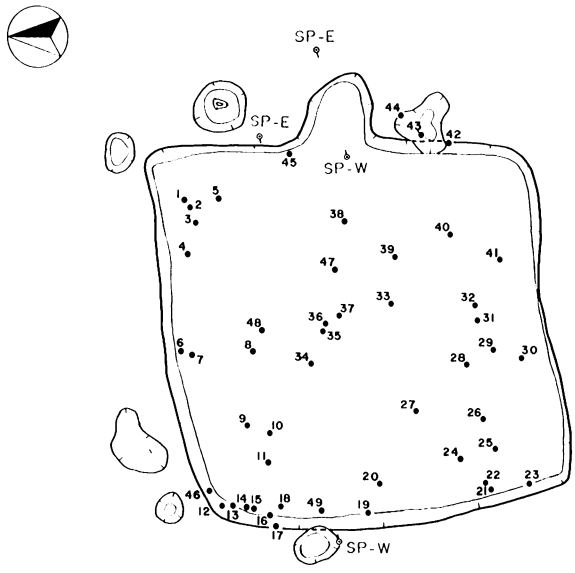
№３１；坏（須恵器）　口径１３．２cm底径７．４cm器高３．３cm　細砂粒混入　焼成；良　灰白色底部から１cm程立ち上がって体部から口縁部にかけては直線的に開く。外面回転ナデ、底部糸切り。内面簡単なナデ、内面中央部が窪む。1/2残

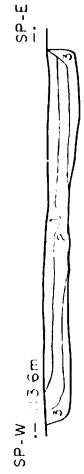
カマド№３；埦　口径１２．０cm底径６．４cm器高５．２cm　細砂を含む　焼成；良　赤橙色　底部から体部の境は僅か内湾し体部から口縁部にかけては直線的に立つ。外面；ロクロ目があり底部と高台部の接合部にヘラナデが見られる。内面もロクロ痕明瞭。（カマド内より３片覆土一括１片接合、2/3残

№２；埦（高台付）口径１１．４cm底径７．０cm器高４．５cm　粗砂混入、石英・黒雲母　焼成；良赤橙色　体部から口縁部は直線的に開き、高い高台を持つ。口縁部は丸味を持つ。内外面回転ナデ、糸切り痕。完形

№２９；埦　土師質　口径１４．４cm推定底径８．４cm器高６．１cm　細砂混入　焼成；良　にぶい赤褐色　高台接合部が厚く口縁部が薄くロクロ目明瞭。外面回転ナデ、底部糸切り痕。内面丁寧なナデ。2/3残

第１１図　９号住居址





９号住居址土層注記

１．焼土と炭化物を僅か含む黒褐色土層

２．１層より焼土粒が多い暗褐色土層

３．焼土粒は少なく粘性の強い暗褐色土層

0　2M

９号住居カマド土層注記

１．褐色土層

２．焼土粒と炭化物を含む暗褐色土層

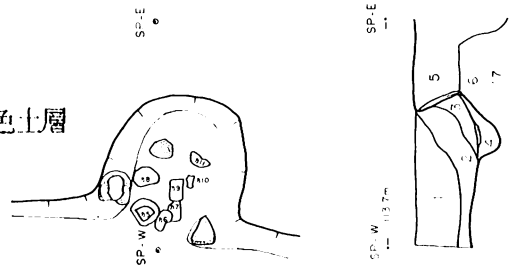
３．灰を含む暗褐色土層

４．粒の粗い焼土と炭化物を含む暗褐色土層

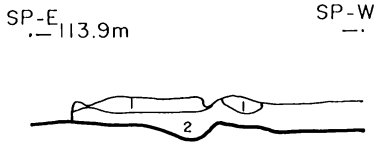
５．暗褐色土層

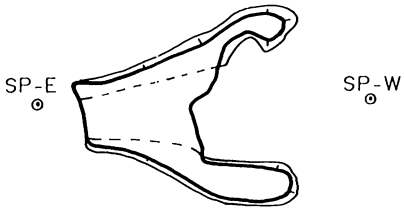
６．灰白色粘質土層

第１２図　９号住居址カマド



0　1M





第１３図　１０号住居址カマド

１．焼土（カマド天井部）

２．焼土粒を含む褐色土層

0　1M

カマドNo.７；（土釜　土師質）口径１８．９cm胴最大径１７．５cm残存高１５．１cm　多量の砂粒を含む　焼成；良　赤褐色　口頸部がコ字状にくびれ胴部は僅かふくらみを持ち直線的に底部方向にすぼまる。外面口頸部横ナデ、胴部縦方向ヘラ削り。内面全体横ナデ。６片（カマドから３片Ｅ－５グリットから２片　覆土一括１片）　1/3残

釘　長さ８cm　径０．５cm　先端に向かうにつれて細くなり直角に屈曲する。断面方形を呈す、先端欠失、頭部はやや広くなっている。

カマド石No.１　カマド構築材と思われる。　長さ１２．３cm幅９．２cm厚さ５．９cm　角閃石安山岩　２．５cm幅のノミ痕あり。

カマド石No.４　高さ１７．０cm幅１０．２cm厚さ９．３cm 安山岩　９号住居址カマド支脚石として使用。上端1/3に煤付着。立った状態で出土しているので設置された位置と考えられる。

１０号住居址

本遺構はＥ－５グリットに位置する。９号住居址の西壁より上層で焼土の塊が確認され、カマドの遺構と考えられるが住居址としてのプランは攪乱が激しく確認することが出来なかった。

２．土坑・井戸跡

１号土坑はＢ－０グリットに位置し、平面形は直径５０ｃｍ、西側に偏平な石（２５×３０cm）が２個あり、北と東に（１２×１２cm）と（１４×１７cm）の石が２個、計４個の輝石安山岩質の自然石が出土し暗褐色土層の上に褐色土と粘土と焼土を盛り上げた状態の土坑であった。
出土遺物は高台坏塊の底部　糸切り痕の坏等小破片２４点が出土しているが時期を決定するには不明の点が多い。

２号土坑はＢ－１グリットに位置し平面形は直径８４×８５cmの円形を呈する。覆土は軽石と炭化物を含む褐色土層であった。
出土遺物　坏蓋摘み等６３点の破片が出土している。

１号井戸跡はＢ－０グリットに位置し１号住居跡の南東コーナを破壊して構築されている。直径１．０２cm円筒形を呈する。連日の雨の為井戸跡の底面迄調査するのは危険が伴うので中止した。
出土遺物は　土師器糸切り痕の見られる坏と塊の破片９５点と須恵器塊・甕・蓋・羽釜等の破片１０２点が出土している。

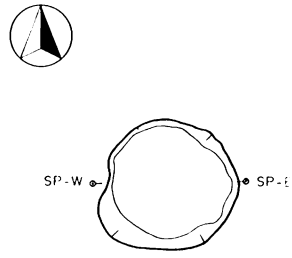
２号井戸跡はＤ－４グリット杭を中心とする直径２．６２ｍのほぼ円形を呈する。ロート型の井戸跡である。今回の調査では井戸の底まで調査する事は湧水が多くて危険が伴うので、やむなく中止した。本遺構からの出土遺物は糸切り痕のある坏２点の他黒色処理された高台付塊の底部、短頸壷の底部、須恵器大甕の胴部等が出土している。

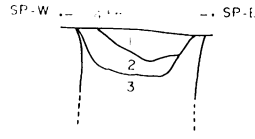
第14図　1号井戸跡土層注記

1．黄褐色土層

2．B軽石（5～10%）含む褐色土層

3．B軽石（40～50%）含む褐色土層





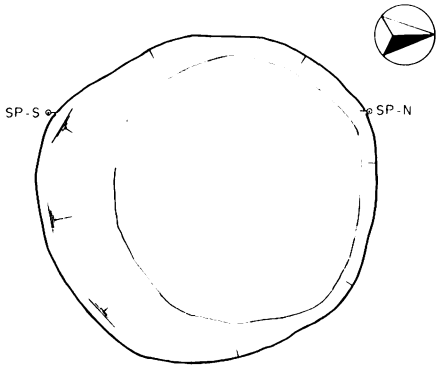
第14図　1号井戸跡

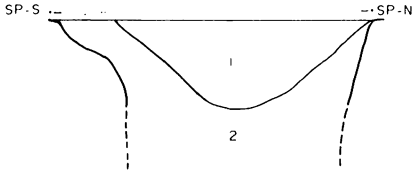
0　2M

第15図　2号井戸跡土層注記

1．B軽石を含む粗い黒褐色土層

2．粘性の強い褐色土層

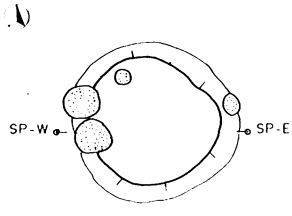


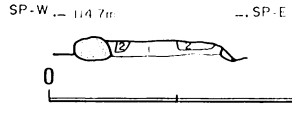


第15図　2号井戸跡

0　2M

第16図　1号土坑





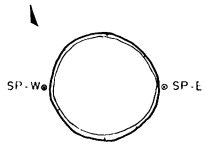
0　1M

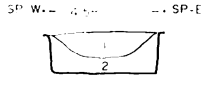
1号土坑土層注記

1．白色粘土と褐色土の混土層

2．白色粘土とブロックを含む褐色土

第17図　2号土坑





土層注記

1．軽石を含む褐色土層

2．軽石と炭化物を含む褐色土層

0　2M

３．溝状遺構

Ｂ－０．１．２．３．　Ｃ－０．１．２．３グリットに東西方向の溝５条とＢ．Ｃ．Ｄ．Ｅ．Ｆ－３グリットに南北方向の溝１条、上幅２５～５２cm、確認面からの深さは６０cmであった。東西方向の溝は浅く畑作跡と思われるが、南北方向の溝は深くその用途については境界か、水切りと考えられる。時期的には近・現代のものと思われる。

４．その他の遺構

Ｅ－１グリットは土師器４９８点、須恵器３２４点、灰釉陶器１７点、石２点、瓦２点合計８５２点の遺物が検出された。Ｅ－２グリットでは土師器５７４点、須恵器６５１点灰釉陶器２５点、鉄滓３点、石１４点、瓦３点、馬歯２点合計１２７４点が検出された。Ｅ－３グリットでは土師器６０点、須恵器５２点、鉄滓２点、石１点合計１１７点が検出された。第１９図に示したように多量の遺物の出土が見られＥ－１グリットとＥ－２グリットの境には大きな炭化物が検出されたが、住居址と考えるには床面やカマドといった生活面も確認できなかった。土坑や溝とも考えられない。

Ｄ･Ｅ･Ｆ－５　Ｃ･Ｄ－６グリットにかけて南北に走る溝が確認された。幅８０～９５cm、深さ２８．５～３３．５cm　この溝が埋め戻されて９号住居址の床が築かれているので９号住居址よりも古い溝と考えられる。

遺物としては流れ込みと考えられる縄文時代中期の土器と平安時代の土器が含まれている。第１８図に示したように、溝の西側には尾根状の高まりがあり女堀の小間割に似た状況が見られるが、これが如何なる用途の為に築かれたか解明するには調査範囲が狭すぎるので断定するには至らなかった。

その他の遺物

Ｃ－２№４；大甕底部　須恵器　推定底径１１．４cm残存高５．０cm　砂粒を多量に含む　堅緻　表　面は青黒色を呈するが中味は暗赤褐色である。丸底で内面に底部と胴部の境に段を持つ。外面　ヘラナデ後横ナデ。内面簡単なナデ。底部のみ。

Ｃ－２№３；底径４．８cm　細砂混入　焼成；良　色調；赤橙　偏平な底部のみで糸切り痕明瞭。皿状の器と考えられる。内面回転ナデ。底部のみ。

Ｃ－４；坏１　推定口径１０．９cm底径６．０cm器高２．９cm多量な細砂粒を含む　堅緻　色調；黄褐色　体部は内湾しながら立ち上がり口唇部で外傾する。外面回転ナデ、底部糸切り。内面全体に丁寧なナデ。2/3残　２片接合。

Ｃ－４；坏２　（土師質）口径１０．２cm底径５．９cm器高３．１cm　細砂混入　焼成；硬　色調；橙　体部に膨らみを有し口縁部は外反する。内外面丁寧な回転ナデ。1/2残

Ｃ－４№１７；高坏　残存高７．２cm　細砂を含む　焼成；堅緻　色調；にぶい黄褐　高坏の柱状部。内外面回転ナデ、脚柱の中央部に沈線が一本見られる。

Ｃ－４№１３；高台付埦（須恵器）底径７．４cm残存高４．０cm 粗砂混入　焼成；堅緻　灰色

高台部はハ字状に開く。内外面煤付着・回転ナデ　外面底部糸切り後貼付け高台。体～底部

Ｃ－４№４；敲石　口径１２cm幅最大径５．６cm底径２．７cm　先端に打痕。中央部擦痕が認められる。

Ｄ－０鉄１；長さ６．３cm幅１．１cm　錆化が進み用途不詳。断面は偏平で全体に湾曲する。

Ｄ－０鉄２；長さ７．４cm幅１．３cm　断面は楕円形を呈し錆化が進み用途不詳。

Ｄ－４№１；皿　口径１２．６cm底径６．０cm器高２．７cm 砂粒混入　堅緻　色調；暗青灰　体部は浅く器肉もやや薄い、僅か内湾気味に立ち上がり口唇部は外傾する。外面回転ナデ、貼付け高台は直線的に立つ。内面丁寧なナデ、中央部盛り上がる。重ね焼き痕明瞭。3/4残

Ｄ－５№３；凹　口径１２．１cm幅６．９cm底径４．７cm 安山岩　二面に高支打による凹あり。明瞭な凹が４ヶ所、両脇にも不明瞭ながら凹が見られる。

Ｅ－１№１；高台付椀　底径１５．６cm残存高１１．４cm　砂粒混入　焼成；堅　体部　は僅か内湾気味に立ち、脚部は「ハ」字状に開く。外面体部は斜方向ヘラ削り後横ナデ、脚部　は横ナデ。内面横ナデ、坏部と脚部の接合部に指押えが見られる。脚部完　坏部1/6残

Ｅ－１№３；椀　高台付　推定口径１４．５cm底径９．６cm器高６．０cm　砂粒を含む　焼成；良　色調；橙　体部は内湾し口縁部は薄く僅か外反する。外面ロクロ目明瞭、糸切り痕。内面と高台の内側、赤色塗採あり。1/4残

Ｅ－１№４；底径６．２cm残存高２．８cm細砂粒を含む焼成；良　暗褐色　底部から体部は強く内湾する。外面は回転撫で、内面と高台部内側に黒色塗布されている。高台部のみ残

Ｅ－１一括１；坏　口径１１．８cm底径５．２cm器高３．２cm細砂粒を含む　焼成；良　黒褐色　体部は内湾しながら立ち上がり口縁部は丸味を持つ内外面黒色塗布外面にはロクロ目が僅か見られる。底部は上げ底部糸切り痕明瞭。内面回転撫で。2/3残

Ｅ－１№５；椀　口径１１．６cm底径５．０cm器高３．８cm細砂粒混入　焼成；良　暗褐色　体部から口縁部は内湾しながら開く、内外面黒色塗布、外面は左回転撫で底部糸切り痕明瞭。内面右回転撫で、底部中心部突出。2/3残

Ｅ－１一括２；坏　口径９．０cm底径６．３cm器高２．０cm粗砂を含む　焼成；軟　浅黄橙色　器肉は　厚く中央部とその周辺が２段に盛り上がる。外面回転撫で、左回転糸切り痕、内面やや荒い撫で。2/3残

Ｅ－１№６；坏（土師質）　口径９．３cm底径４．５cm器高３．４cm細砂混入　焼成；良　にぶい橙色　体部は内湾気味に立ち上がり口縁部で僅か外反する。外面はロクロ目が見られ底部は糸切り痕明瞭。内外面回転撫で。1/3残

Ｅ－１№28；坏（土師質）　口径１１．５cm底径５．６cm器高３．８cm砂粒を多量に含む　焼成；良橙色　体部は直線的に立ち上がり口縁部で外反する。体部と口縁部の境がやや薄くなっている。外面回転撫で底部糸切り僅か上げ底になっている。内面回転撫体部はやや深い。1/2残

Ｅ－１№一括３；坏（土師質）　口径１０．２cm底径４．２cm器高２．８cm細砂を含む　焼成；良

にぶい橙色　体部は内湾し口縁部で外傾する。外面はロクロ目が見られ底部は糸切り部分が厚くなっている。内外面回転撫で。1/3残

Ｅ－２№２；坏（土師質）　口径８．３cm底径４．２cm器高１．８cm　粗砂混入　焼成；軟　浅黄橙色体部は緩く内湾し口唇部に至る。底部は右回転糸切り痕明瞭。内面やや粗い回転撫でが見られる。完形

Ｅ－２№６；坏　底径６．０cm残存高２．５cm　砂粒混入　焼成；良　褐色（部分的に灰褐）体部中位に段を持ち底部は上底を呈す。内面中位に凹を持つ。外面糸切り後指ナデした痕が見られ繊維の上に置かれたスジが３本見られる。内面は丁寧な回転ナデ。口縁部を欠く。

Ｅグリット一括；埦（土師器）底径１１．８cm残存高６．１cm　褐色砂粒混入　焼成；良　暗赤色高い高台の付く高台付埦の高台部、高台部外面は指ナデ、高台貼付けは厚くなっている。内面埦底部回転ナデ。高台部1/2残。

Ｅ－２№７；カマド構築材と思われる。長さ１５．５cm幅１０．３cm厚さ５．８cm　黄褐色砂岩で表面にカマドに使用されたと思われる焼けた跡が見られる。ノミの痕２ヶ所あり。

Ｅ－４；高台付埦　灰釉　口径１５．６cm底径６．６cm器高８．２cm　細砂を含む　堅緻　灰白色体部は大きく丸味を持ち深く内湾しながら立ち上がる。器肉は薄い。貼付け高台。外面体部灰釉の掛かっている部分まで横ナデ中位から底部はヘラ調整。内面回転ナデ。1/2残弱

Ｅ－５№１７；坏　土師器　口径１２．６cm器高４．２cm　多量の細砂を含む　焼成；良　明赤褐色　底部はヘラ削りで丸味を持つ。口縁部は内傾。外面ヘラ削り。内面丁寧なナデ。2/3残

Ｅ－５グリット一括１；皿　口径９．３cm底径４．６cm器高１．７cm　細砂を含む　焼成；軟　色調；　浅黄橙　体部から直線的に開き口縁部に至る。厚い底部である。外面回転ナデ、底部回転糸切り痕。内面回転ナデ。2/3残　３片接合。

Ｅ－５グリット一括２；坏　口径１３．１cm底径５．８cm器高４．１cm　粗砂混入　焼成；やや軟　暗青灰色　体部は内湾気味に立ち上がり口縁部は僅かに外反する。外面底部回転糸切りロクロ目、イブシ焼成。内面暗褐色を呈し、丁寧なナデが見られる。欠けた断面は摩耗が目立つ。

Ｅ－５グリット一括３；蓋　須恵器　宝珠径２．０cm器高２．１cm　砂粒を多量に含む　堅緻　青灰色宝珠形つまみで中央部が特に高くなっている。内外面回転ナデ。宝珠と天井部の一部のみ。

Ｅ－５グリット一括４；皿　口径１４．４cm底径７．２cm器高３．２cm　砂粒を含む　堅緻　暗青灰色　体部は直線　的に開き口唇部は外傾し丸味を持つ。外面回転糸切り痕明瞭。高台部は「ハ」字状に立つ、貼　付け高台はヘラナデ。内面丁寧なナデ。2/3残。

Ｈ－１０一括；長さ７．８cm幅４．４cm厚さ１．９cm　自然面を残す。剥離面明瞭。未完成品。

Ｈ－９掘り方一括；長さ９．２cm幅５．０cm厚さ１．８cm　打製石斧　頁岩　自然面を残す。剥離面は見られるが未完成品。

Ｃ－４グリット一括、補修孔をもつ土師器甕　外面箆削り、内面箆撫で、良く整えられている。

Ｃ－４グリット№１８、羽釜口縁から胴部の破片鍔の部分に４～５mmの穴が２ヶ所あいている。

内外面撫

Ｃ－４グリット一括、内面は横ナデ、外面把手状を呈しヘラナデにより稜線がくっきりした小破片、胴部との接合部に３．５～４㎜の穴が穿たれている。須恵器外面に自然釉が見られる。

Ｅ－１　瓦質６面がヘラナデがされ、把手のような器形を呈す。

Ｆ－１　土師器坏、底部右回転糸切痕、内外面丁寧なナデ、内面に朱の付着が見られる。

一括遺物の中に埴輪の破片が出土されている。内外面櫛目が見られる。高坏の坏部と脚部の接合部で中央に接合用の１～１．２㎝の穿が見られる。和泉期の特徴かと考えられる。

表採；石斧　長さ１１．３㎝幅４．７㎝厚さ１．４㎝　短冊型　断面くの字状　片面に自然面残す。

まとめ

天神Ⅱ遺跡の調査により次の事項が明らかになった。以下箇条書にその要旨を列記すると下記の通りである。

１．９号住居址の東側は２０°～３０°の急勾配で傾斜している事から平安時代本遺跡の東側は谷地状地形をなしていたことが伺われる。

２．天神遺跡では濃密な住居址が確認されたが、北側では少ない事が報告されている。隣接する当遺跡ではさらに遺構数が疎になっている事が確認された。

３．本遺跡では平安時代の隅丸方形の住居址８軒と円形土坑２基、井戸跡２基が確認された。

４．Ｅ－２グリットから出土した砂質凝灰岩の切石は、染谷川の段丘崖を供給地とするカマド構架材として利用したものと考えられる。この切石には幅３㎝程の工具痕が見られノミ状工具の使用が推測される。

５．第１８図に示した遺構は傾斜地の上端に水路を築き、その西側に小区割が確認された。この遺構は女堀の小間割遺構に類似するものと考えられる。

６．本遺跡で特筆される事は緑釉の出土量の豊富なことがあげられる。緑釉陶器は淡緑色で器形は高台付椀と考えられる。灰釉陶器２９５点、緑釉陶器５７点が出土している。

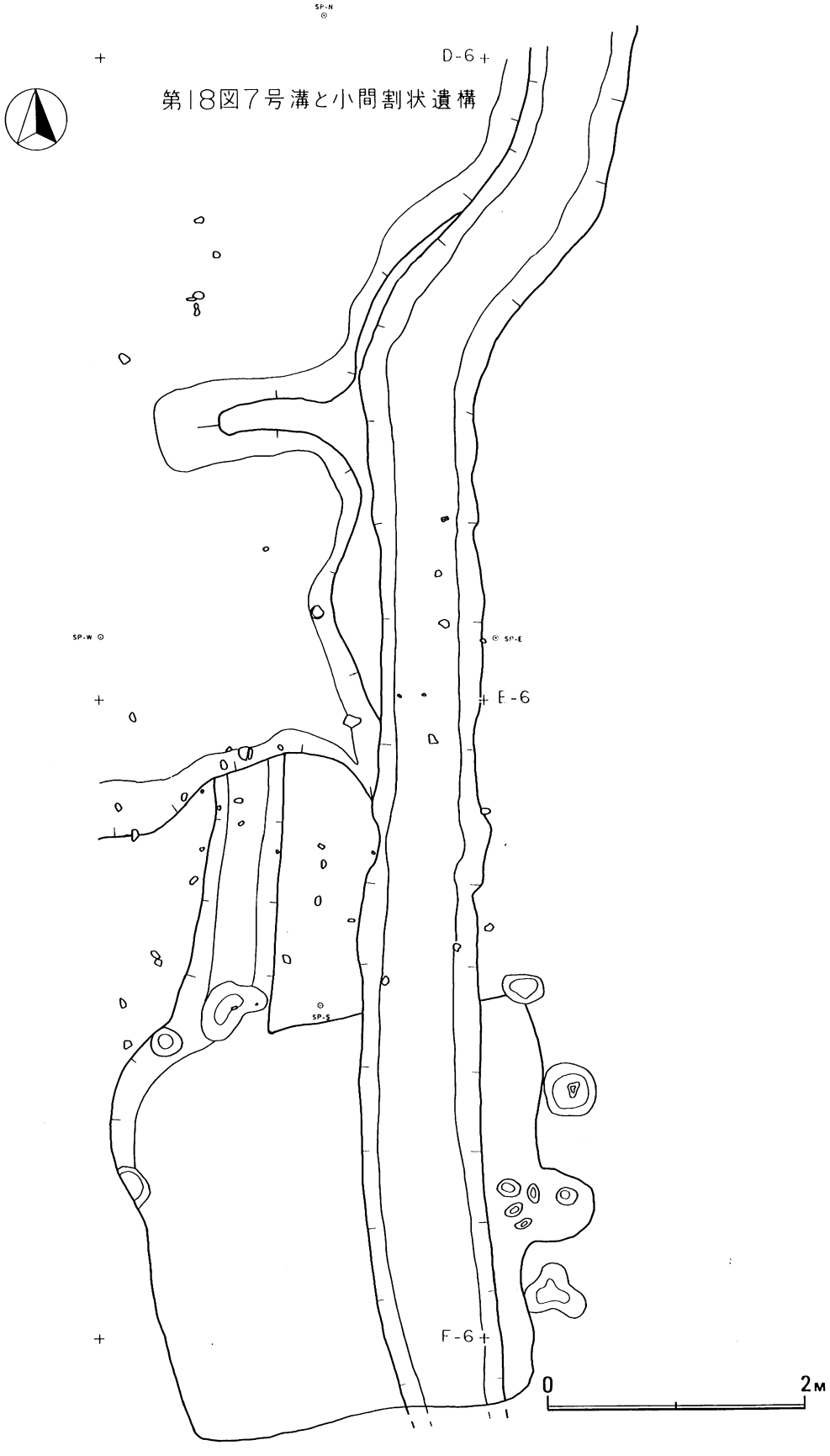
７．本遺跡では土師器、須恵器そして灰釉陶器が多量に出土している。特に顕著なのがＥ－１．２．３グリットである。

８．瓦も小破片ではあるが６６点検出された。

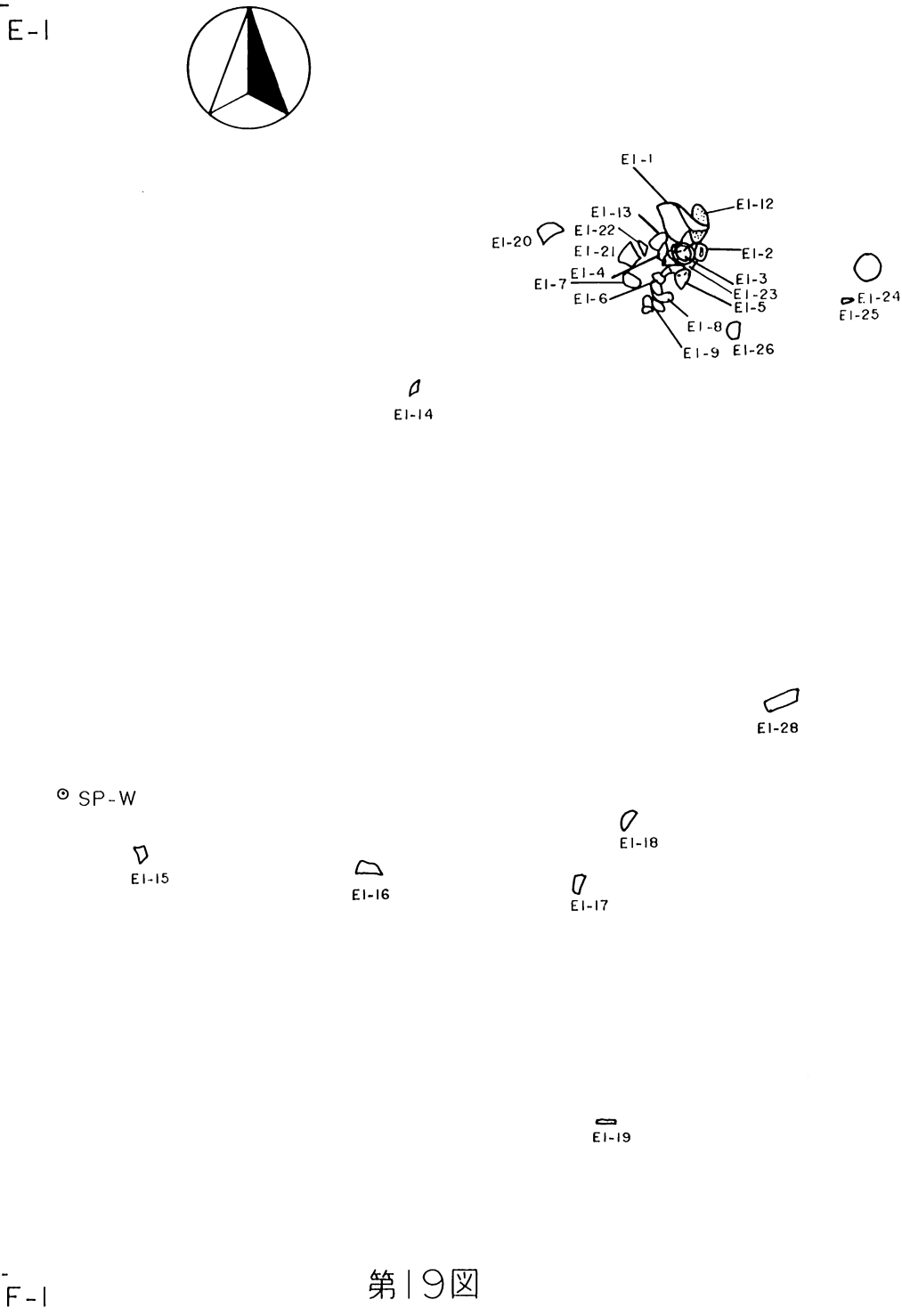
９．魚撈具としての土錘が１点出土している。

10．住居内から出土している瓦は草作遺跡で報告されてるように国府あるいは山王廃寺の瓦が使われたとすれば官衛施設や寺が衰亡していく状態を想定されるひとつの材料になる。

11．製鉄に関する遺物として鉄滓４１点、羽口の破片５点、鉄製品１２点、鉄滓の中には炉床の丸味をそのまま残すもの２点が検出され、その上面には植物の繊維が明瞭な形で残存している。以上の事から踏鞴の存在する事が考えられるが遺構として捉えるには至らなかった。

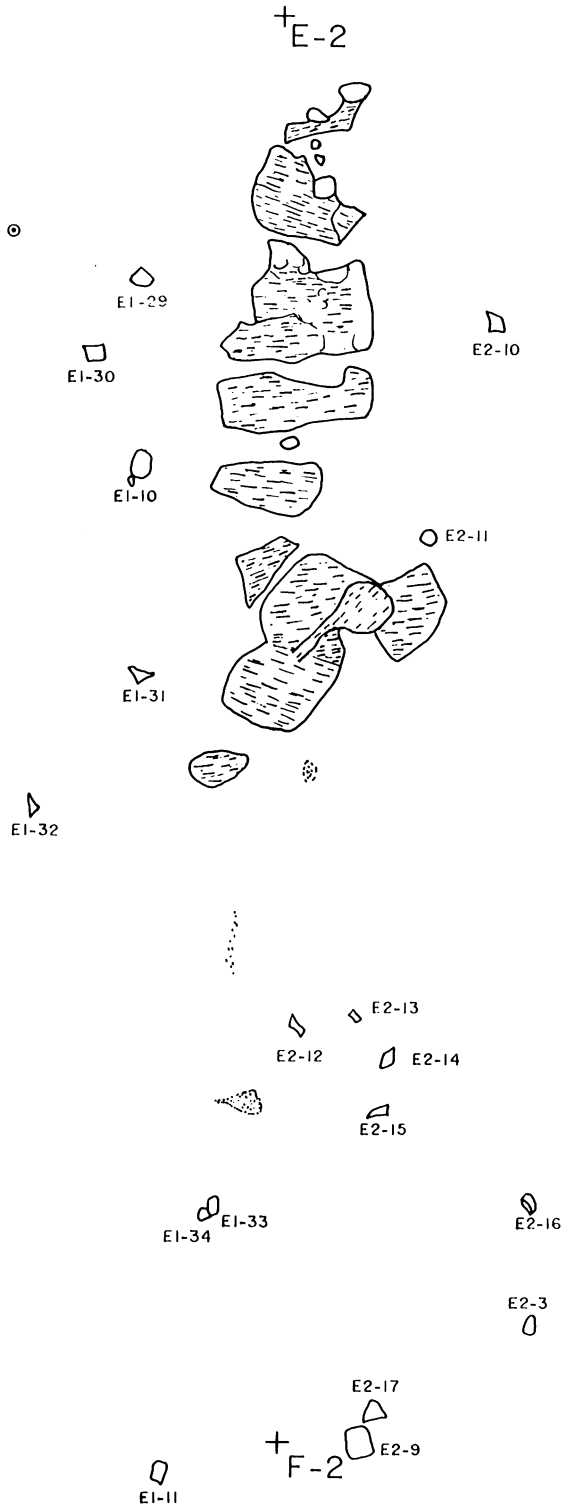


第18図7号溝と小間割状遺構

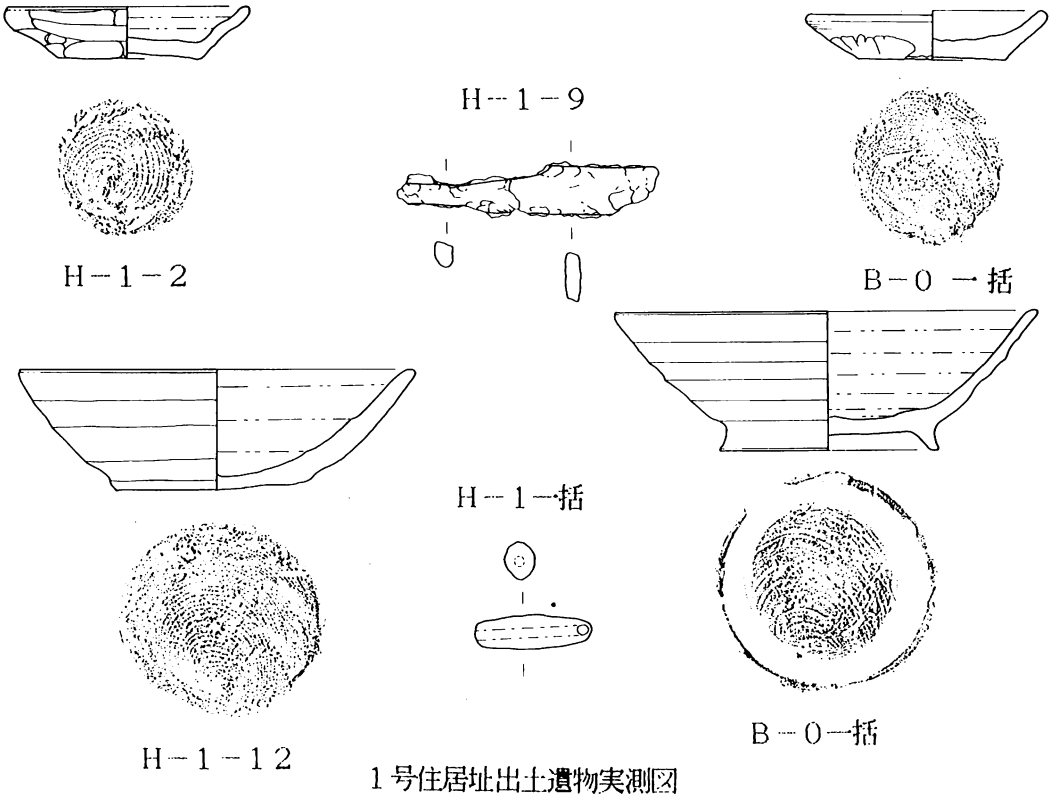


第19図

E-1.2.3グリット遺物出土状況

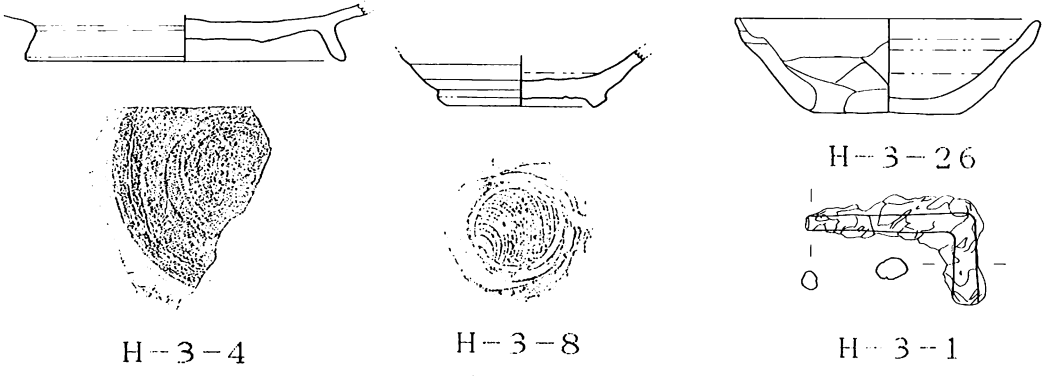

E-2
E1-29
E2-10
E1-30
E1-10
E2-11
E1-31
E1-32
E2-13
E2-12
E2-14
E2-15
E1-33
E1-34
E2-16
E2-3
E2-17
E2-9
F-2
E1-11

E-3
SP-N
E2-19
E2-20
E2-33
E2-34
E2-1
E2-35
E2-7
E2-36
E2-63
E2-2
E2-67
E3-2
E3-3
E2-18
E2-21
E2-61
E2-57
E2-62
E2-59
E2-60
E2-58
E2-66
E2-65
E2-68
E2-69
E3-5
E3-4
E3-6
E2-64
E2-23
E2-37
E2-56
E3-1
E3-7
E3-8
E2-71
E3-9
E2-72
E2-38
E2-70
E2-8
E2-22
E2-39
E2-40
E2-52
E2-53
E2-54
E3-11
E3-10
E3-12
SP-E
E3-13
E2-24
E2-48
E2-49
E3-14
E3-15
E2-41
E2-25
E2-44
E2-50
E2-55
E2-42
E2-43
E2-51
E2-26
E2-28
E2-27
E2-30
E2-45
E3-17
E3-18
E2-29
E2-31
E2-32
E2-5
E2-46
E2-47
E2-4
E2-6
SP-S
F-3



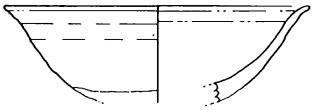
1号住居址出土遺物実測図

2号住居址出土遺物実測図

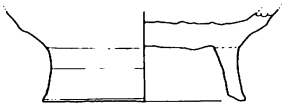


3号住居址出土遺物実測図

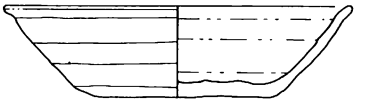
0 10cm



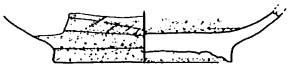
H－5－19



H－5－4

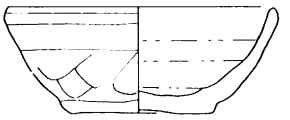


H－5　坏



H－5　埦

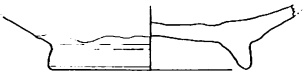
5号住居址出土遺物実測図



H－6－1

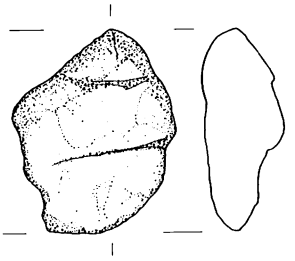
H－6－16

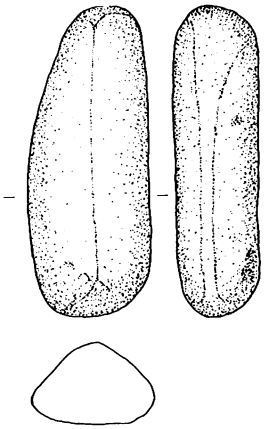
H－7－37



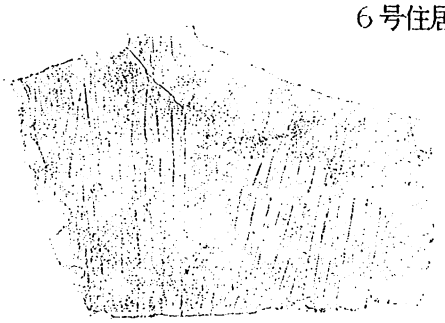
7号住居址出土遺物実測図

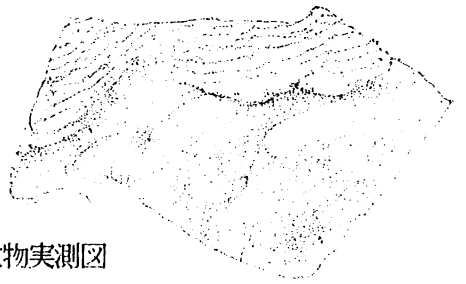
H－6－19





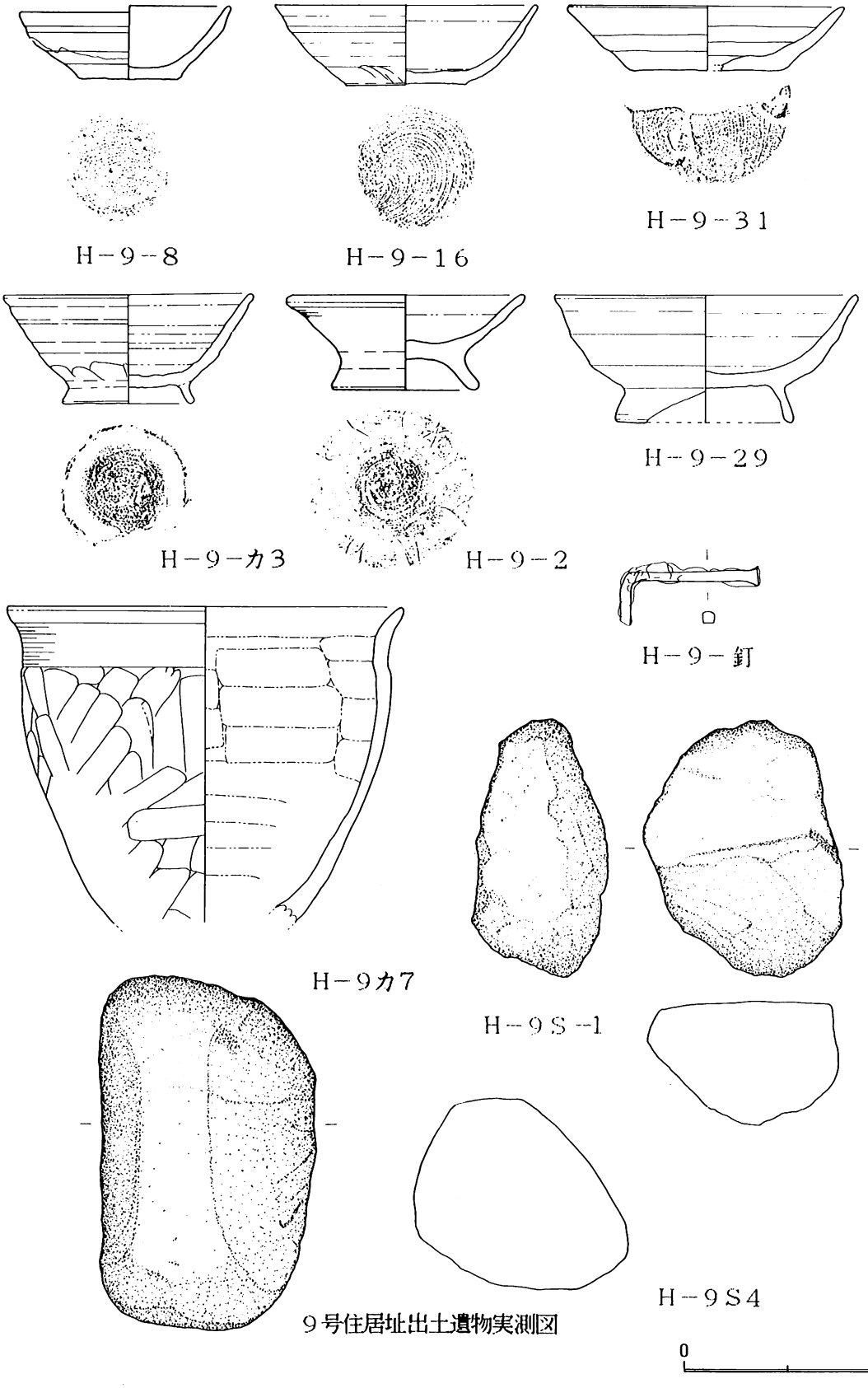
6号住居址出土遺物実測図



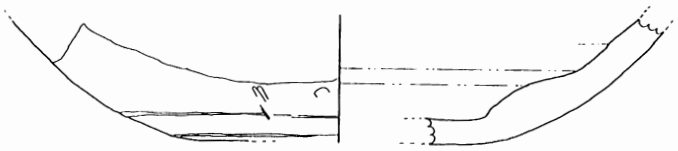


H－9－3　　9号住居址出土遺物実測図

0　　10cm

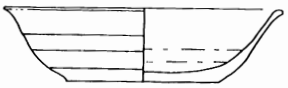


9号住居址出土遺物実測図

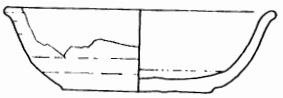


C－2－4

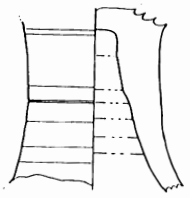
C－2－3



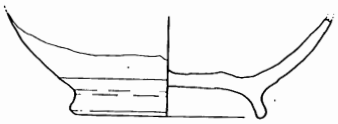
C－4坏1



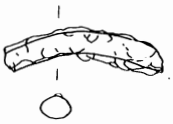
C－4坏2



C－4－17



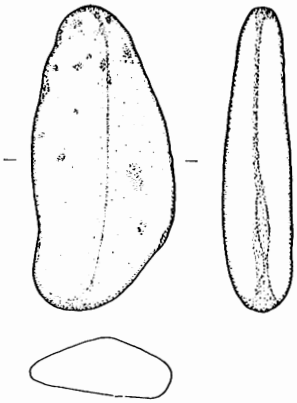
C－4－13



D－0鉄1

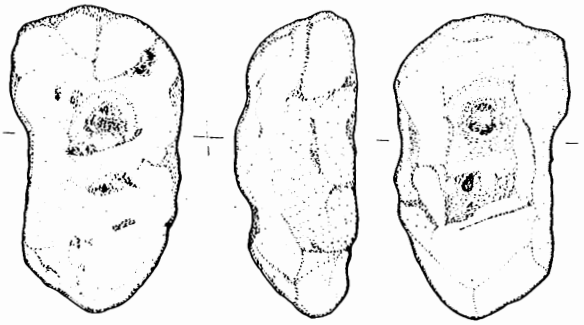
D－4－1

D－0鉄2

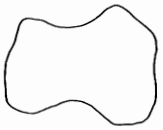


C－4－4

Cグリット出土遺物実測図

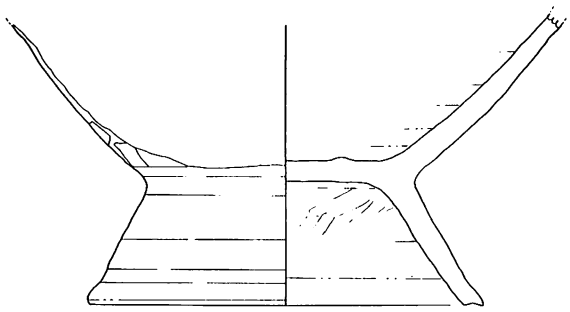


D－5－3

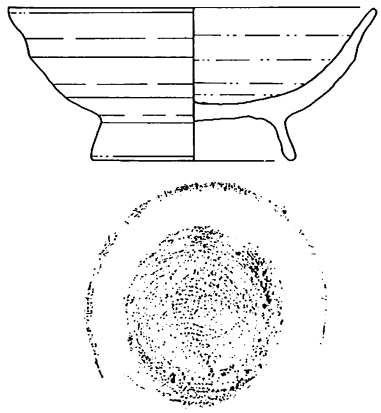


Dグリット出土遺物実測図

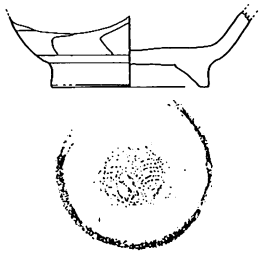
0　10cm



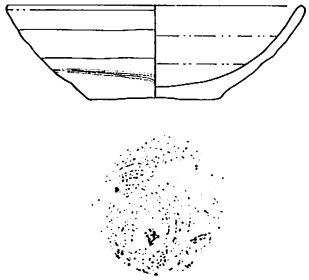
E－1－1



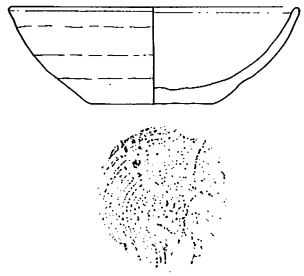
E－1－3



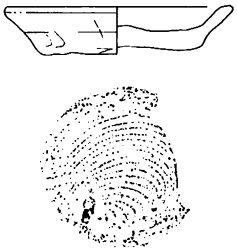
E－1－4



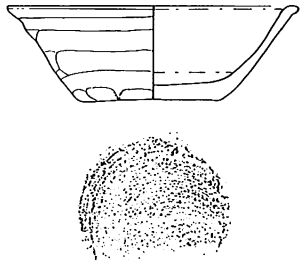
E－1一括 1



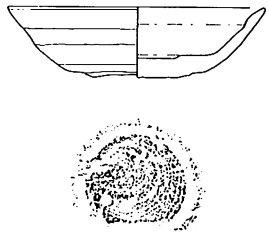
E－1－5



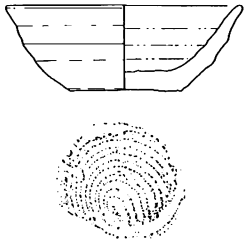
E－1一括 2



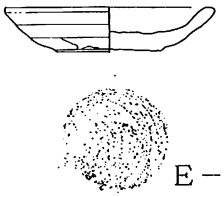
E－1－28



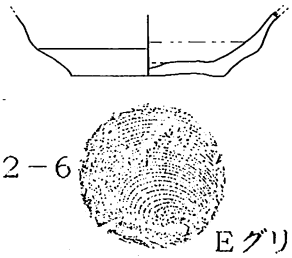
E－1一括 3



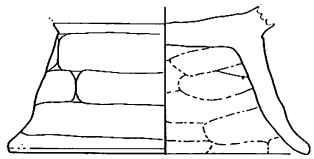
E－1－6



E－2－2



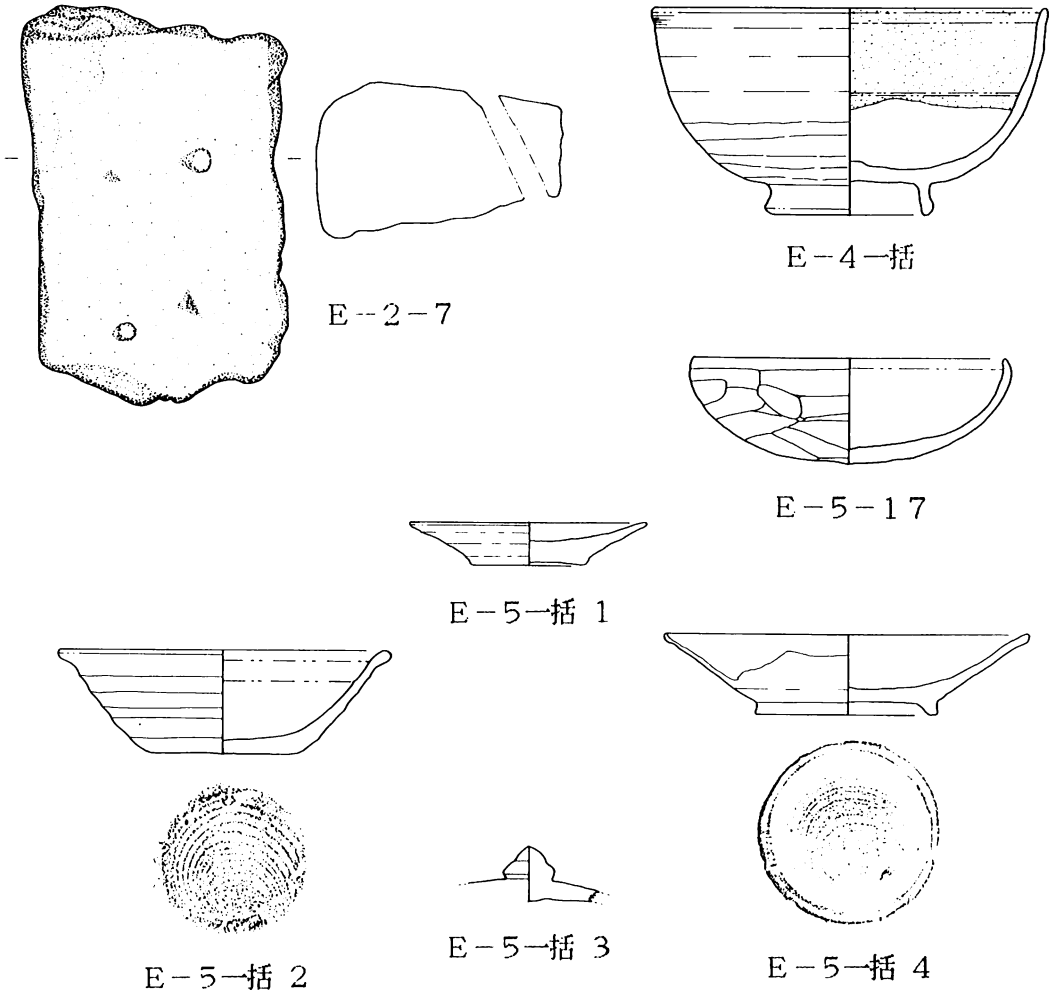
E－2－6



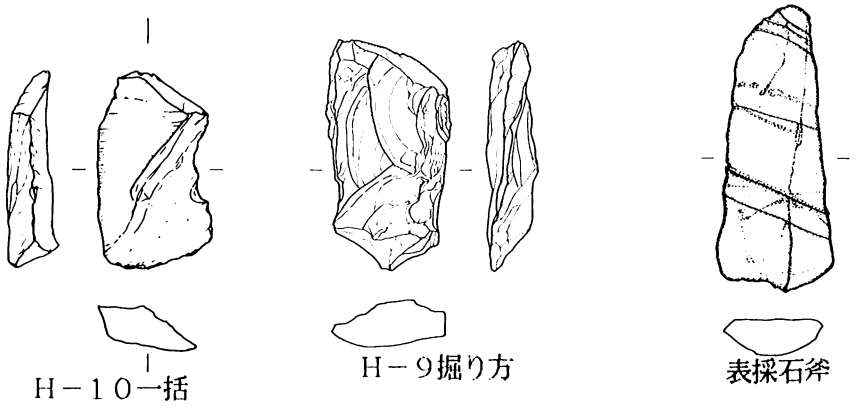
Eグリット一括

Eグリット出土遺物実測図

0　10cm

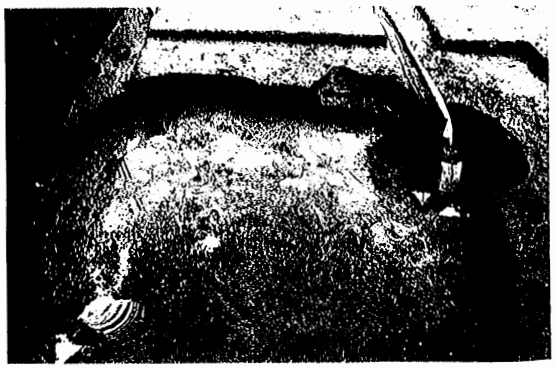


E－グリット出土遺物実測図

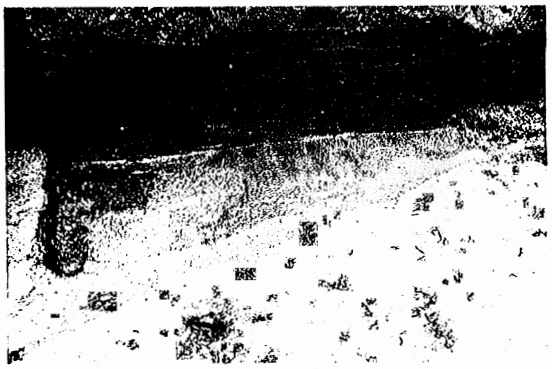


天神Ⅱ遺跡より検出された石器類

0　10cm



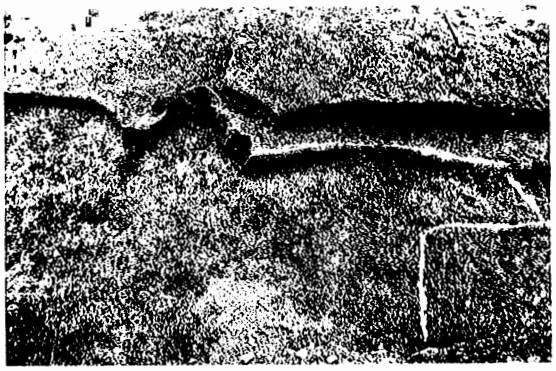
1号住居址全景



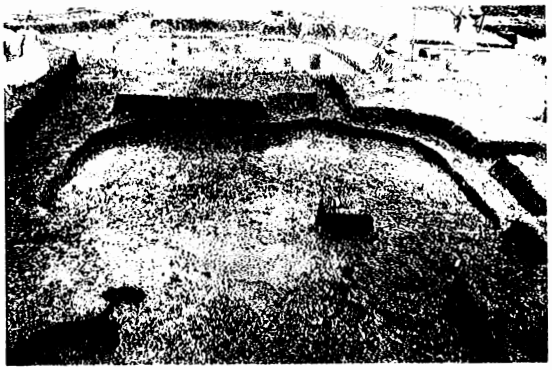
2号住居址全景

3号住居址全景

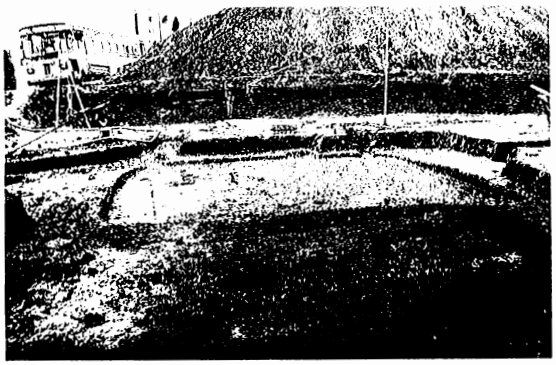
3号住居カマド全景



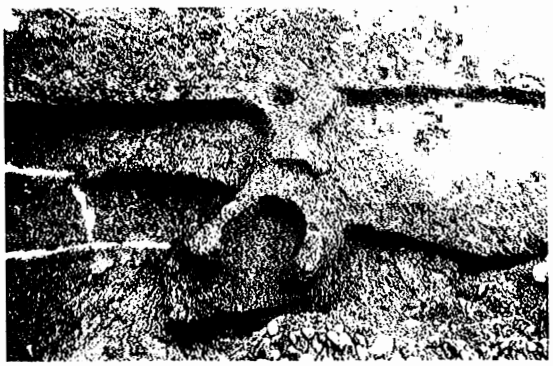
4号住居址全景



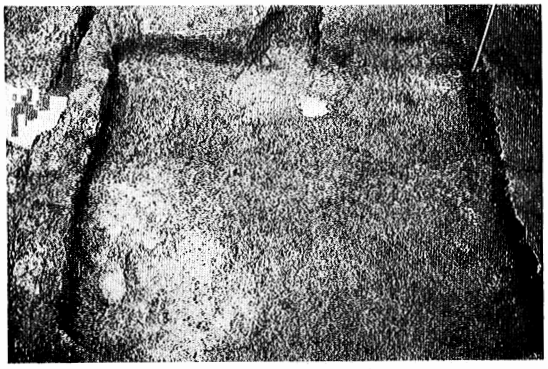
5号住居址全景



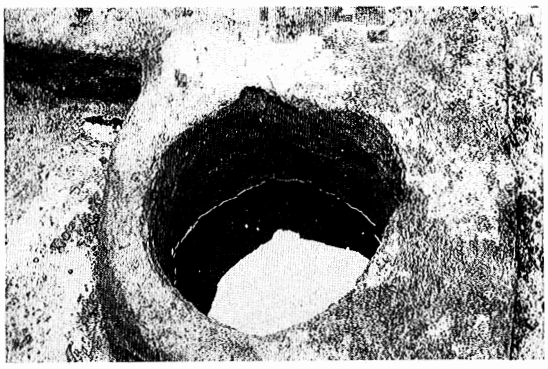
6号住居址全景



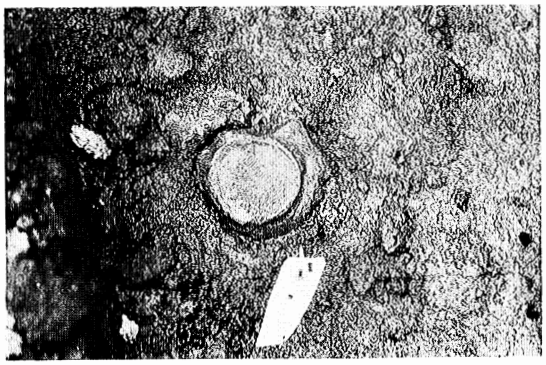
7号住居址全景



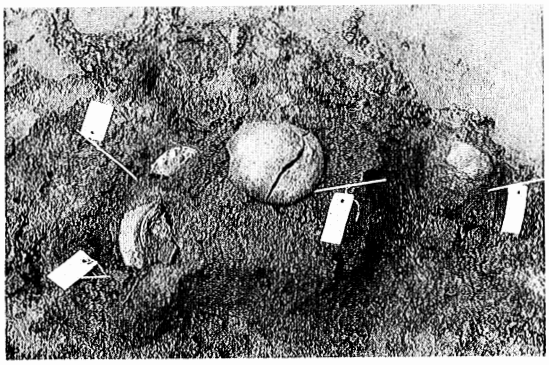
９号住居址全景



１号井戸跡

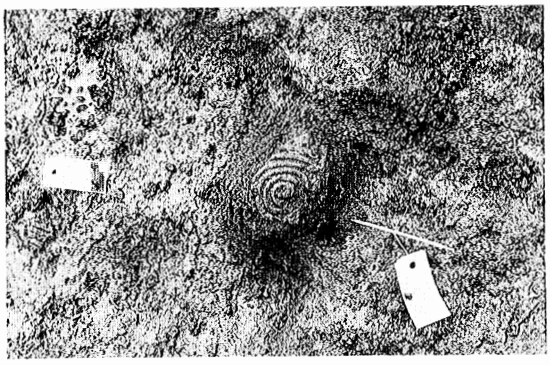


Ｅ－５グリットNo.１出土状況



Ｅ－５ｸﾞﾘｯﾄNo.16・17・18・19出土状況

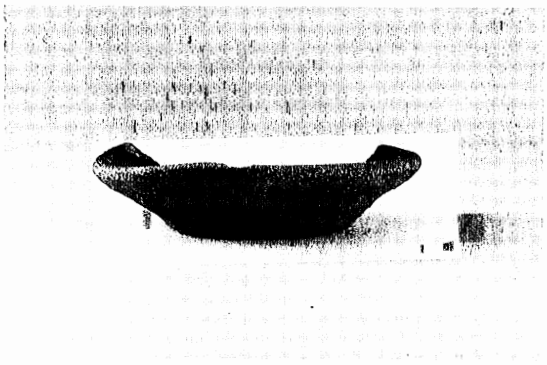
Ｅ－５グリットNo.２３出土状況



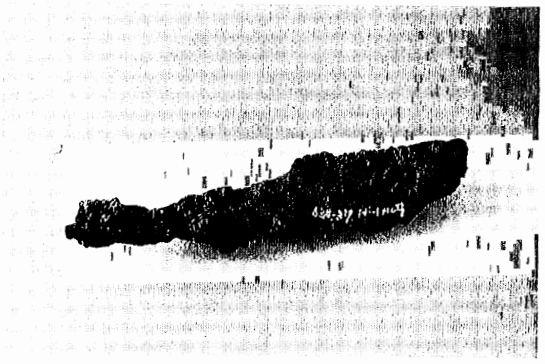
Ｄ－５グリットNo.９出土状況

９号住居址No.３出土状況

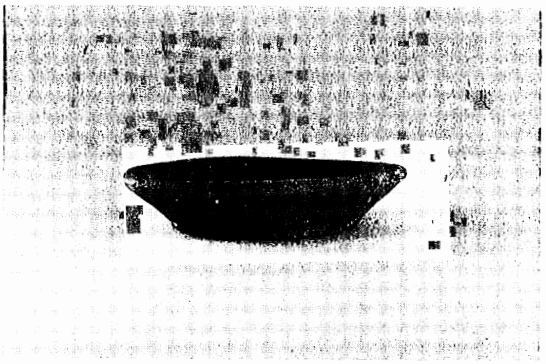
９号住居址ｶﾏﾄﾞ内遺物出土状況



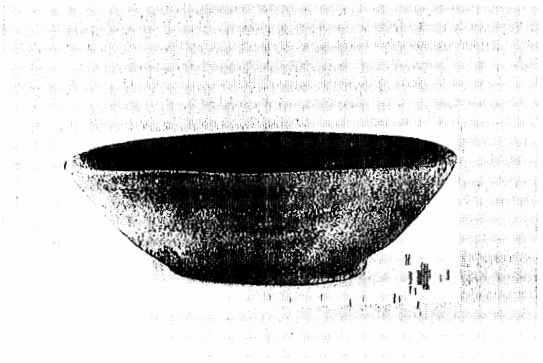
H－1 No.2



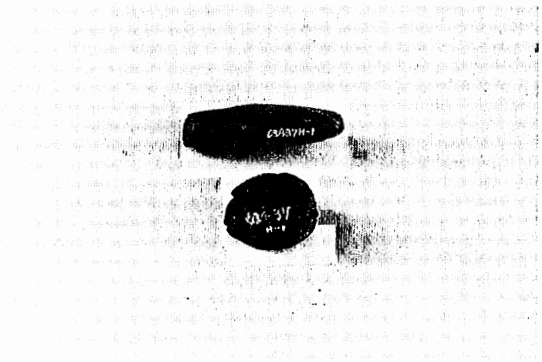
H－1 No.9



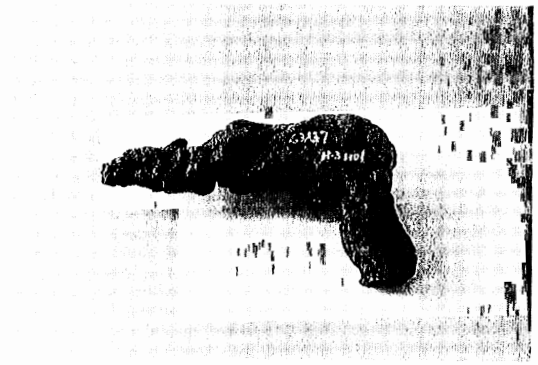
B－0グリット一括



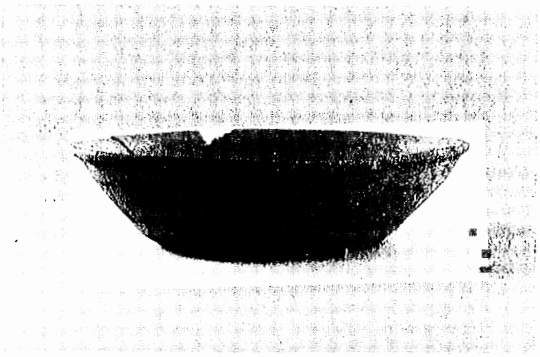
H－1 No.12



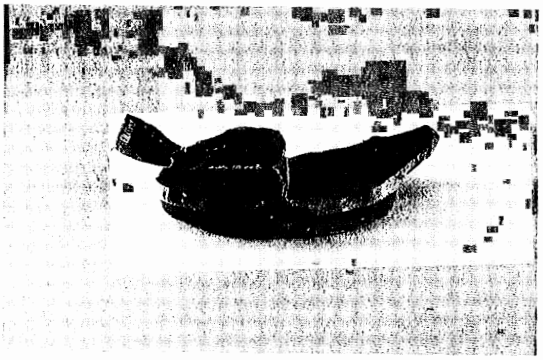
H－1土錘・桃の種



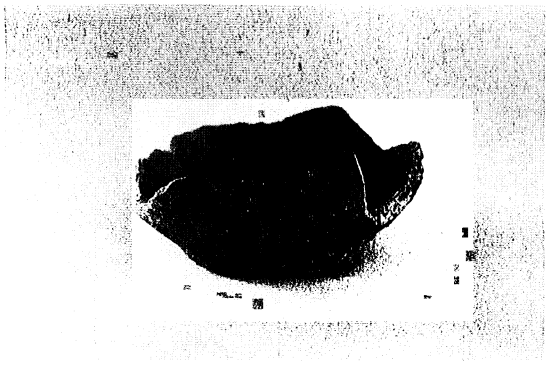
H－3 No.1



H－5覆土一括　坏

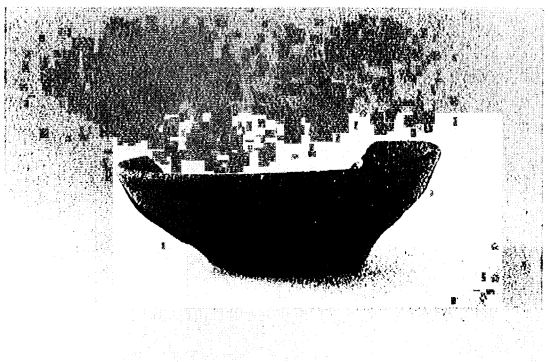


H－5覆土一括　埦

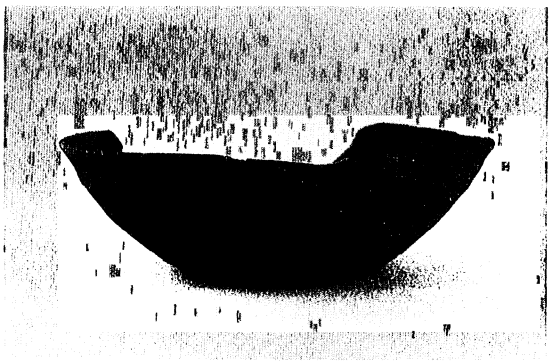


H－6 No.1

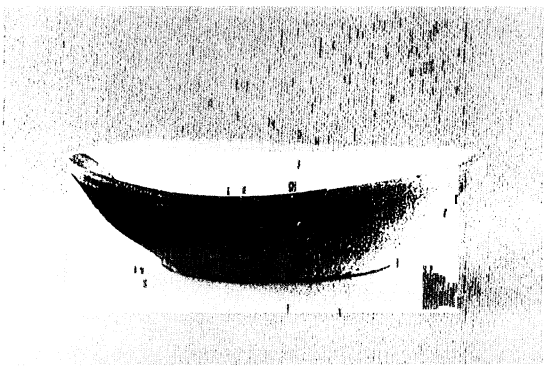
H－6 No.19



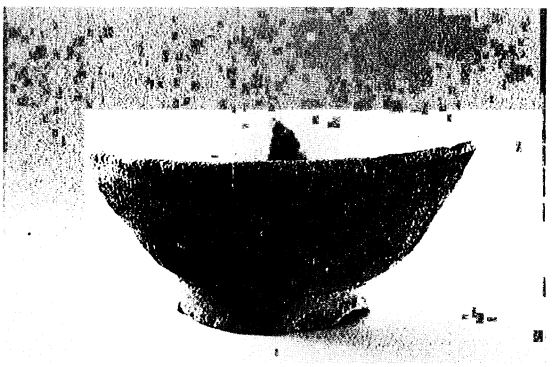
H－9 No.8



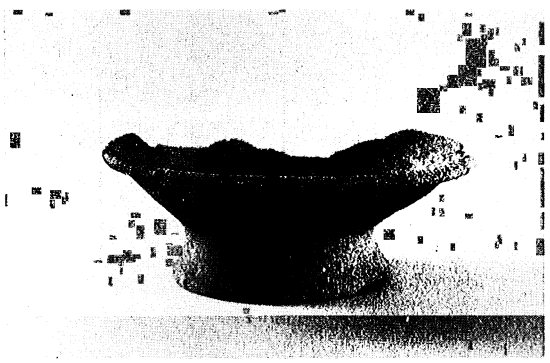
H－9 No.16



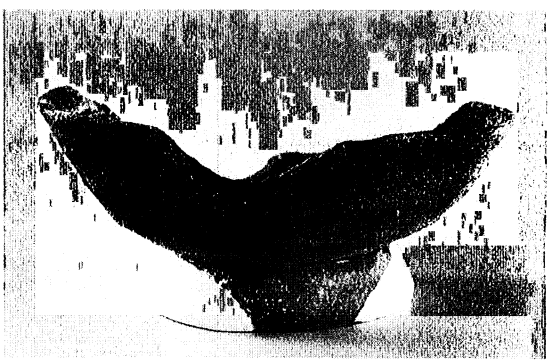
H－9 No.31



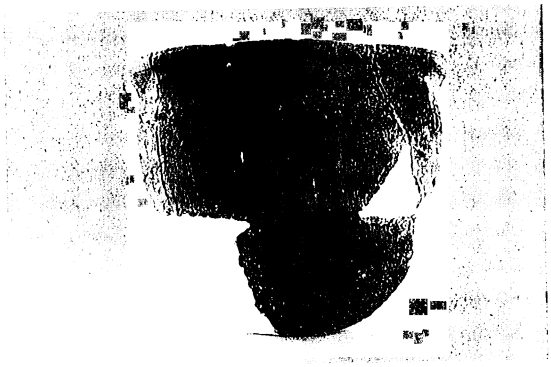
H－9カマド No.3



H－9カマド No.2



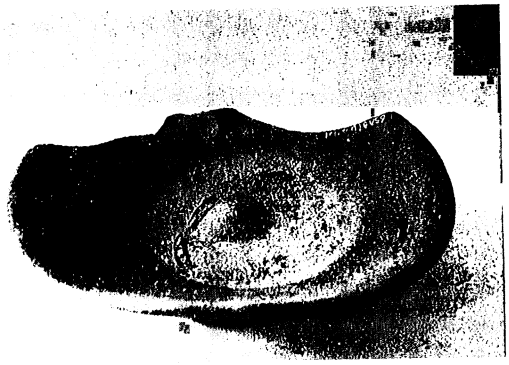
H－9 No.29



H－9カマドNo.7

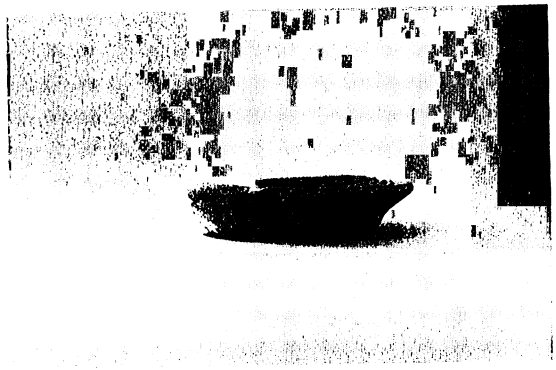
H－9釘

D－0グリット鉄1・鉄2



D－4グリットNo.1

E－1グリットNo.1

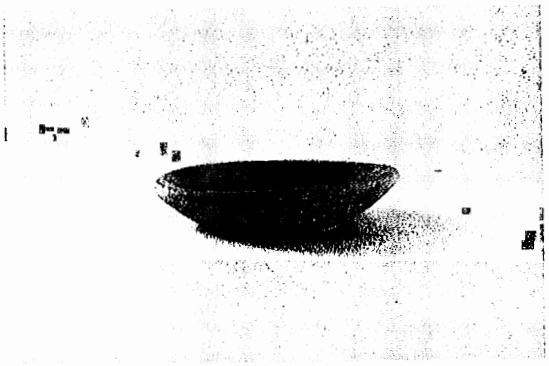


E－1グリット一括2

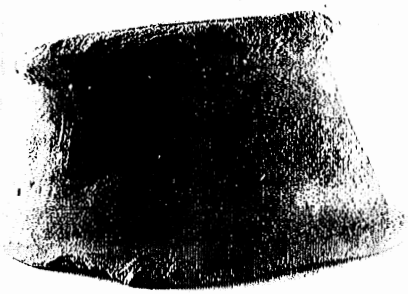
E－1グリットNo.5

E－1グリット一括

E－1グリットNo.6

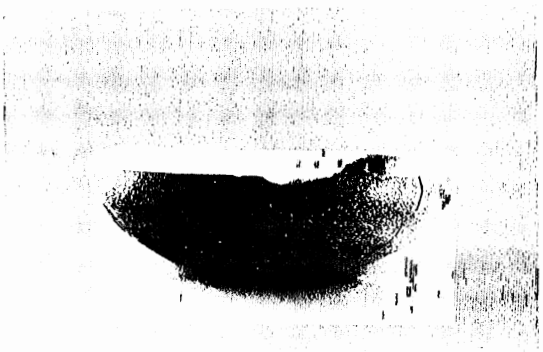


E－2グリットNo.2



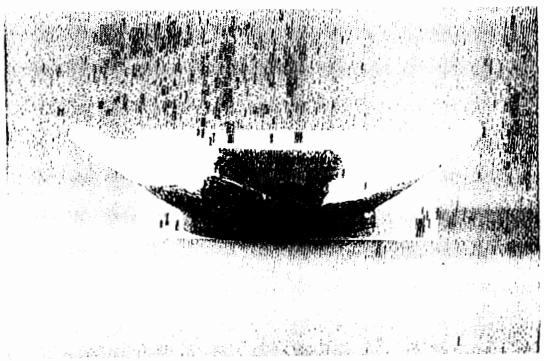
Eグリット一括

E－4グリット一括

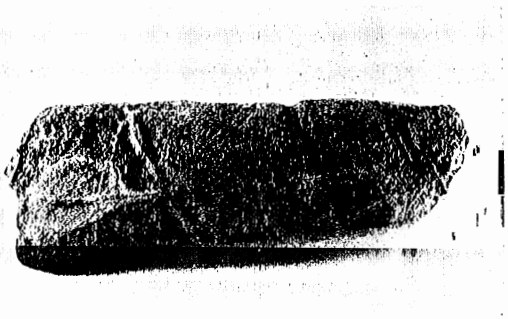


E－5グリットNo.17

E－5グリット一括2



E－5グリット一括4



表採石斧

天 神 II 遺 跡

平成元年 1月20日 印刷
平成元年 1月30日 発行

発行 前 橋 市 教 育 委 員 会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集 スナガ環境測設株式会社
印刷 上 毎 印 刷 工 業 株 式 会 社